

埋蔵文化財調査報告書

藤橋遺跡

尾立遺跡

旧富岡農学校跡遺跡

1977

長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会

埋蔵文化財調査報告書

藤橋遺跡
尾立遺跡
旧富岡農学校跡遺跡

1977

長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会

序

この調査報告書は、藤橋遺跡、尾立遺跡の一部を含む一帯に大規模な開発が計画されたことにより、緊急に埋蔵文化財の発掘調査（遺跡範囲確認調査）を実施した記録です。

このたびの調査対象となった長岡市西津町及び上富岡町の一帯は、はるかに信濃川を望む西部丘陵地帯にあって、以前から地元民によって土器や石器等の出土品が確認されていたところであります。

申しあげるまでもなく、文化財はその地域や、わが国の歴史を正しく理解するために欠くことのできないものであり、かつ、将来の文化の向上発展の基礎をなすものであります。今回の調査によって発見された遺物や住居跡をみると、ここにあらためて、古き時代をしのび郷土に対する愛着を一層強くするものであります。

この調査は、長岡市が国の補助金を得て、市は長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会に委託をして実施したものであり、この報告書は、その調査結果にもとづくものであります。

今後、出土品とともに、文化財の理解と認識を深めていくうえで活用される事を切望してやみません。

最後に、今回の調査にあたりご指導、ご助言をいただいた関係機関はもとより、ご協力いただきました関係者に対し心からお礼申し上げます。

昭和52年3月

長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会

委員長 山田 幸男

例　　言

1. 本書は長岡市川西地区に予想される開発に対応するための資料作成を目的とした新潟県長岡市藤橋・尾立・旧富岡農学校跡遺跡の試掘調査の記録である。
2. この試掘調査は長岡市の委託を受けて、長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会が調査を実施し、駒形敏朗が試掘調査を担当した。本調査には担当者以下調査員として、寺崎裕助・神林昭一が専従し、中村孝三郎氏には相談員として考古学的な御指導をいただいた。
3. 遺物の整理・復元には調査員があたり、本多昌治の協力があった。遺物の実測・写真撮影および図版等の作成は駒形（藤橋遺跡）と寺崎（尾立遺跡）が担当した。なお、第8図7は星山芳樹氏が一部実測し、駒形がトレースした。
4. 本書は分担執筆をしたもので、文末に執筆者の氏名を明記した。
5. 本文中における氏名は敬称を略させていただいた。
6. 試掘調査から遺物整理および本書の作成まで、下記の方々や機関から御指導・御協力を賜った。深く感謝します。（五十音順・敬称略）

安孫子昭二、石井克己、字之津昌則、家田順一郎、可見通宏、金子拓男、鰐井今日子、桑野一幸、小林達雄、斎藤基生、笠沢浩、関雅之、高橋桂、高橋保、高橋陽子、竹田祐司、多々静治、種村貞二、坪井清足、戸根与八郎、豊巻幸正、中島栄一、中島庄一、波多野至朗、羽根川康信・チヨ、原田享二、樋田直人、深井義春、星山芳樹、本間信昭、前山精明、宮崎博、雪田孝、若松茂、株式会社竹中工務店、小山農機、須坂市立須坂博物館、中央道遺跡調査団、長岡市深才連絡所、長岡市立表町小学校、長野市教育委員会、明治大学考古学研究室

目 次

I 調査の経緯	1
1. 調査に至る経過	1
2. 発掘調査の経過	1
II 地理的・歴史的環境	4
III 藤橋遺跡	5
1. 調査の経過	5
2. 土 層	5
3. 遺 構	6
(1) 第1号住居址 (2) 第1号溝	
4. 遺 物	10
(1) 繩文土器 (2) 土製品 (3) 石製品 (4) 石器	
(5) 須恵器 (6) 中世陶質土器	
5. まとめ	17
IV 尾立遺跡	18
1. 調査の経過	18
2. 土 層	18
3. 遺 構	19
(1) 第1号住居址 (2) 第1号建物址 (3) 第2号建物址	
(4) 第3号建物址 (5) 第4号建物址 (6) 第1号土壙	
(7) 第2号土壙 (8) ピット群	
4. 遺 物	27
(1) 繩文土器 (2) 弥生土器 (3) 石器	
5. まとめ	30
(1) 土器について (2) 遺構について (3) 試掘について	
V 旧富岡農学校跡遺跡	32

図 版 目 次

- | | |
|--|--|
| 図版第1図 遺跡附近の航空写真 | 尾立遺跡遠景・尾立遺跡近景 |
| 藤橋遺跡遠景 | |
| 図版第2図 藤橋遺跡第1号住居址 | 尾立遺跡第1号住居址 |
| 藤橋遺跡ビット群 | |
| 図版第3図 藤橋遺跡第1号溝・第1号溝北
東コーナー・第1号溝北西コーナー・
第1号溝西辺断面・第1号溝北辺断面 | 尾立遺跡第1号建物址・尾立遺跡第3号建物址
第1号柱穴・第3号建物址第2号柱穴・第3号建物址第3号柱穴 |
| 図版第4図 縄文土器 | 遺構出土土器 |
| 図版第5図 土製品・石製品・石器 | 遺構出土土器・縄文土器 |
| | 図版第11図 弥生土器・石器 |

挿 図 目 次

- | | |
|--------------------------|----|
| 第1図 グリッド設定図 | 2 |
| 第2図 遺跡位置図 | 4 |
| 第3図 土層柱状図 | 5 |
| 第4図 第1号住居址出土土器 | 6 |
| 第5図 第1号住居址実測図 | 6 |
| 第6図 第1号溝及び柱穴出土遺物 | 7 |
| 第7図 第1号溝及び柱穴群実測図 | 8 |
| 第8図 縄文土器・中世陶質土器 | 11 |
| 第9図 縄文土器 | 13 |
| 第10図 縄文土器 | 14 |
| 第11図 縄文土器・須恵器・中世陶質
土器 | 15 |
| 第12図 玉類 | 16 |
| 第13図 土製品・石器 | 16 |
| 第14図 土層柱状図 | 18 |
| 第15図 遺構配列図 | 19 |
| 第16図 第1号住居址実測図 | 21 |
| 第17図 第1号建物址実測図 | 21 |
| 第18図 第2号建物址実測図 | 22 |
| 第19図 第3号建物址実測図 | 22 |
| 第20図 第4号建物址実測図 | 23 |
| 第21図 第1号土塗実測図 | 24 |
| 第22図 第2号土塗実測図 | 24 |
| 第23図 遺構出土土器 | 25 |
| 第24図 遺構出土土器 | 26 |
| 第25図 縄文土器・弥生土器 | 27 |
| 第26図 縄文土器・弥生土器 | 29 |

I 調査の経緯

1. 調査に至る経過

長岡市は新しい地方中核都市を目指し、総合的な開発整備事業として長岡ニュータウンを中心とする西部丘陵地域の開発計画を発表した。これは関原、宮本、大積、深沢地区の丘陵地にニュータウンを建設しようとするもので、これにより近隣地区をも含めた開発発展・整備を目的としている。このためニュータウン計画対象地域内及び隣接地域に所在する埋蔵文化財の確認と、その処置についての問題解決が急務とされてきた。

このような状況下において、文化庁および県教育厅文化行政課から、深才地域に所在する藤橋遺跡、尾立遺跡、旧富岡農学校跡遺跡の規模・内容等の確認を目的とする試掘調査の必要性について指導を受けた。

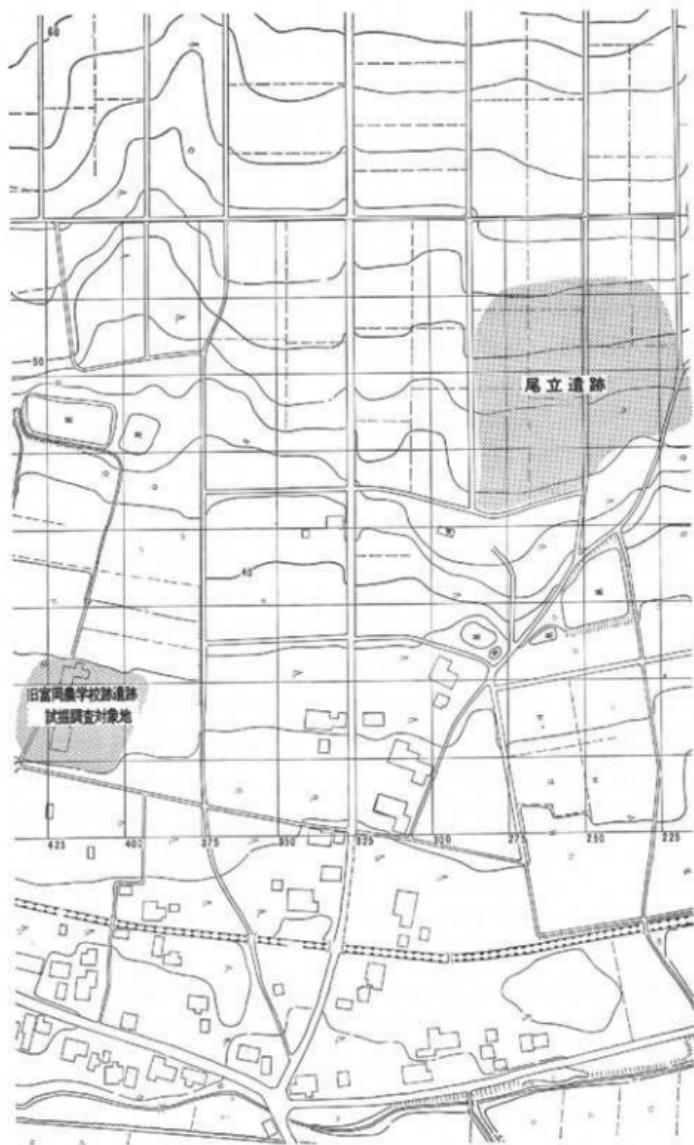
このため、市は関係機関と協議した結果、調査会（長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会）を組織し、調査会に調査を委託した。調査会は数回の打ち合わせをおこない、昭和50年12月下旬から調査を開始した。
（本多昌治）

2. 発掘調査の経過

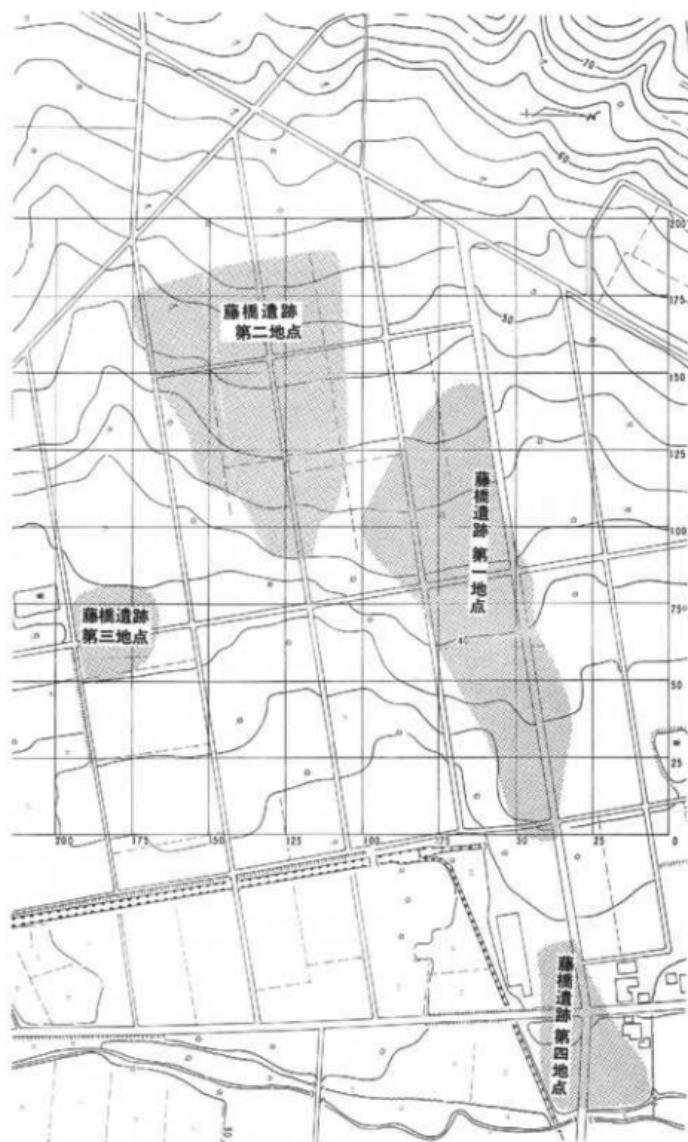
調査は昭和50年の暮から開始され、昭和51年3月末までには県教育厅文化行政課の指導によって発掘グリッドの基本杭設置と、ボーリング調査等が実施された。発掘グリッドは $2 \times 2 m$ を一区画として藤橋遺跡の北東部に原点をおき、原点から南へのびる座標軸をX軸、西へのびる座標軸をY軸とし、藤橋・尾立それに旧富岡農学校跡遺跡の3遺跡を覆うように共通のグリッドを設定した。グリッドの名称は数字を用いて、(X, Y)と配列することにした。

発掘調査は昭和51年5月17日から5月22日まで尾立遺跡、5月24日から6月19日まで藤橋遺跡、その後旧富岡農学校跡遺跡を調査することで実施していった。調査が進むにつれ、尾立遺跡では第1号住居址及び第1号・第2号建物址の一部が発見され、また藤橋遺跡において、第1号溝の一部が検出された。このため文化庁および県教育厅文化行政課の指導を得て、発見された遺構の性格を把握することを目的として、より詳細な調査を実施することになった。この結果、藤橋遺跡の調査は7月10日まで延期し、尾立遺跡の第2次調査を7月12日から8月21日まで行うことになった。

旧富岡農学校跡遺跡は8月23日から8月31日の間に試掘調査を実施したが、過去に水田として改良され、さらに近年には牧草地等の利用目的から再改良が加えられたこともあり、土層は地表面をも含め擾乱されており、遺物・遺構は発見されなかった。これらのことから、本遺跡は遺跡であるかどうか非常に疑しい面をもっていた。
（鈴木敏郎）



第1図 グリッド設定図



(1:3500)

II 地理的・歴史的環境

長岡市は新潟県のほぼ中央部に位置し、川口町で魚野川と合流した信濃川が渡海川をものみこみ、市内を南北に貫流している。この信濃川は妻有地方で有数の河岸段丘を発達させ、さらに長岡市附近でも左岸一渡海川との合流点から北で高寺・関原・上富岡・深沢の4面の河岸段丘^(註)を形成している。この段丘上には繩文草創期の上の沢をはじめ、中期の転堂・南原・馬高、後期の三十船場・岩野原等の先史時代の各遺跡が分布している。このような中にあって、藤橋・尾立・旧富岡農学校跡の3遺跡も標高30~50mの深沢面に位置し、河岸段丘上を生活の場として利用していた。特に、中期の馬高・後期の三十船場・岩野原に続く、後・晚期の藤橋・弥生の尾立がこれらの大集落と同一空間上に位置し、先史時代の人々が活躍していたことは注目に値するであろう。なお、3遺跡の現状は畑・水田・荒地・林等になっていた。

(註) 新潟平野団体研究グループ「十日町盆地の河岸段丘」地質学論集第7号 昭和47年(寺崎裕助)



第2図 遺跡位置図(1:5万、長岡)

- 1.馬高・三十船場 2.上の沢 3.転堂 4.南原 5.駒村
- 6.松山 7.藤橋 8.尾立 9.旧富岡農学校跡 10.稚打場
- 11.岩の原

III 藤 橋 遺 跡

1. 調査の経過

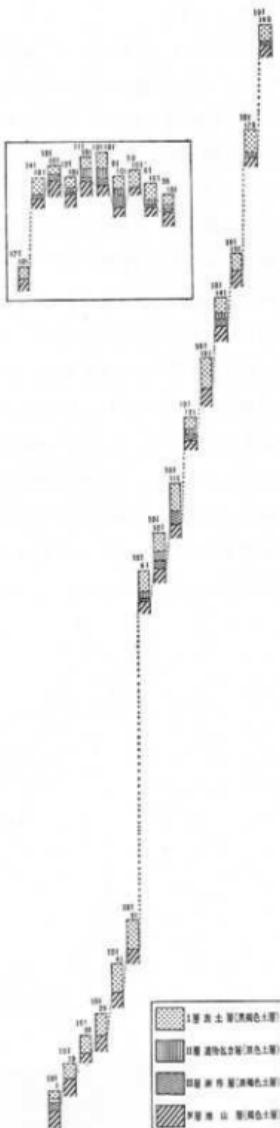
本遺跡の試掘調査は昭和15年度に実施したボーリング調査等によって得た資料をもとに、原点からX軸・Y軸ともに400m=160,000平方メートルを試掘対象地とした。調査は2ないしは3グリッドを一区画とし、林地及び火葬場等を除いた発掘可能のグリッドを原点からX・Y軸とも20mおきに発掘することを原則とした。また、発見した遺物は取りあげるが、遺構は平面プランのままとすることも原則として調査を実施していった。

これをもとに調査していくところ(147, 172)で土器利用の炉を、(123, 184~185)で巾2mの落込みを発見した。このため周辺を発掘し、その性格を把握することにした。この結果、第1号住居址と第1号溝の存在が確認された。また、遺物は第1~第4地点(第1図)にわかれ集中し、第1・第2地点では遺構の存在が確認された。
(鈴木敏郎)

2. 土 層(第3図)

本遺跡の基本土層はⅠ表土、Ⅱ黒色土(遺物包含層)、Ⅲ地山漸移層、Ⅳ地山に分層される。このうちⅡ層はところによって消滅しており、土層堆積に変化がみられた。このⅡ層は第1~第4地点(第1図)でよくみられ、特に(51~121, 91~121)ではよく発達し、遺物の出土量が多く、遺構も顕著であった。しかし、第1地点と第3地点にはさまれた水田地帯の(70~110, 10~50)ではⅡ層がなく、表土下30cmで湧水帶に達した。この地域での遺物量は少なく、遺構も検出されず、遺物の集中もみられないところから、出土遺物は西側斜面からの流れ込みであろうと思われる。

(寺崎裕助)



第3図 土層柱状図

3. 遺構

本遺跡で発見された遺構は住居址と中世の溝が一基づつ、それに多数の円形を呈するピットである。住居址と溝の一部および溝に閉まれた中にあるピットの一部を完掘したのみである。

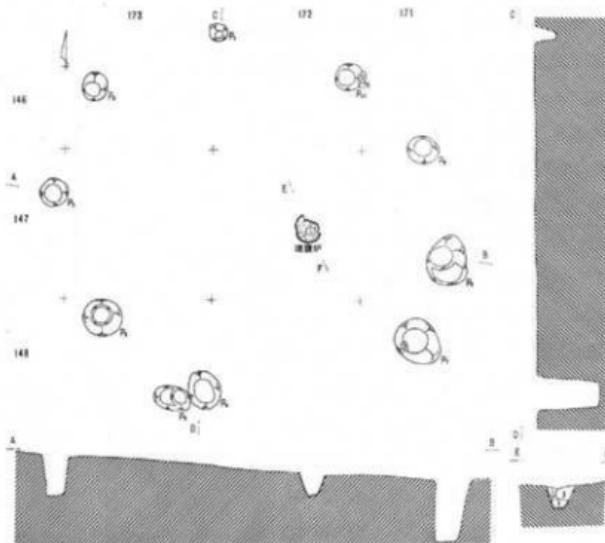
(1) 第1号住居址(第5図、図版第2図上)

本址は第2地点で埋甕炉を中心として10基の柱穴が円形に配列された状態で発見され、住居址と考えた。本址に周壁や周溝がないのは地山と地表との土層厚が10~15cmと薄いためか、構築時になかったのか、そのいずれかであろう。柱穴の深度は30~80cm位であった。炉は第4図1の土器を使い、内に1・細かい焼土、2・炭と焼土、3・灰、4・炭と焼土が多く充满していた。炉の土器は2次焼成のためもろくなり、底面に網代痕が残るだけである。遺物はこの他に3Pで撫糸文(2)、7Pで工字文(3・4)の土器が出土し、本址は大洞A式期と思われる。(鈴形敏朗)



第4図 第1号住居址出土土器

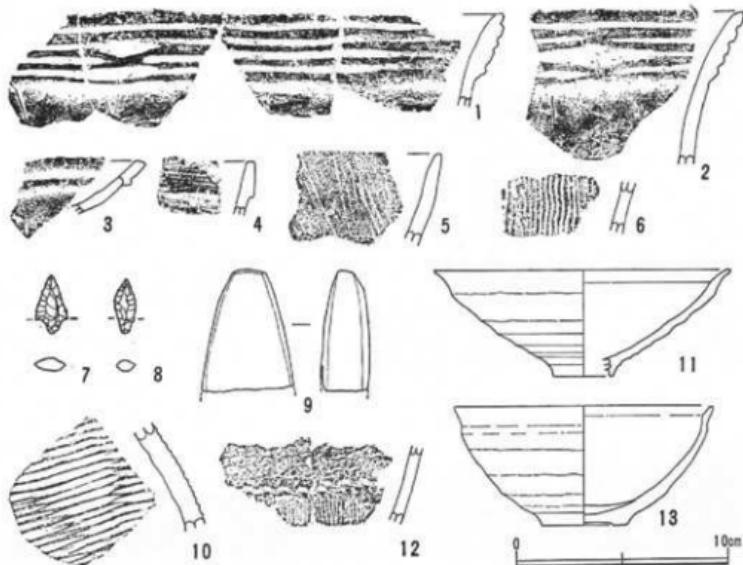
(1・36, 2~4・36)



第5図 第1号住居址実測図(1:60)

(2) 第1号溝(第7図、図版第3図) 溝は本遺跡西側の第2地点で発見された。今回発掘した溝は北辺の全体と東・西辺の一部、それに溝に埋まれたピットの一部である。溝の南辺は東西にのびる沢を利用していたと思われる、東辺が(158、169)で消滅していた。溝の規模は東西約45m(北辺)×南北約80m(東辺)で、ほぼ南北に長い方形をしているものと思われる。溝はC-D線でみられるようにⅢ層地山漸移層面を切って構築され、横断面は幅1.5~2m、深さ50cm~1mを測り、幅広のU字形を呈している。溝の北西コーナーは(116・117、183・184)で直角に折れ曲り、北東コーナーは(118~120、162~163)に位置し、北辺と東辺の間には約10cmの段差があった。北東コーナーの東辺は北へ突き出し、東へ3条の溝が走っているが、その性格は不明である。溝は東西で5mの傾斜があり、水濠として使用されたかは判明できない。また、溝に埋まれた中にある大小数多くのピットもその性格を想定するにはいたらなかった。溝出土の遺物(第6図1~11)は縄文と中世のものがある。縄文の遺物は口縁部に工字文を施した土器(1~3)や、石鋤(7・8)、磨製石斧(9)等が出土している。中世の遺物には条線状叩目が施された珠洲系陶質土器の變形土器(10)や、青い釉のかかった磁器(11)がある。

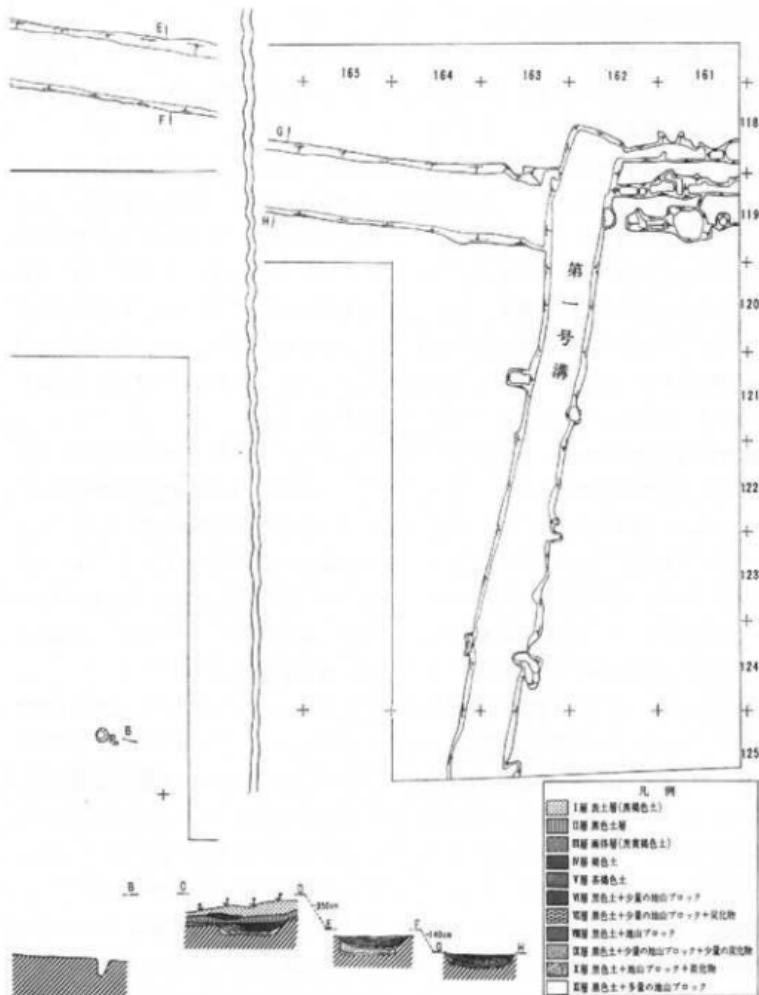
（鉢形敏朗）



第6図 第1号溝及び柱穴出土遺物



第7図 第1号溝及び



柱穴群実測図(1:120)

4. 遺物

本調査で出土した遺物は縄文土器・須恵器・中世陶質土器・石鎌・石斧等の石器・玉類等々多種類にわたり、総数は平箱にして約70箱分で、その多くが縄文土器であった。

(1) 縄文土器 本遺跡出土の縄文土器は中期後葉、後期前葉・後葉それに晩期のものがあり、晩期の中・後葉の土器が最も多かった。

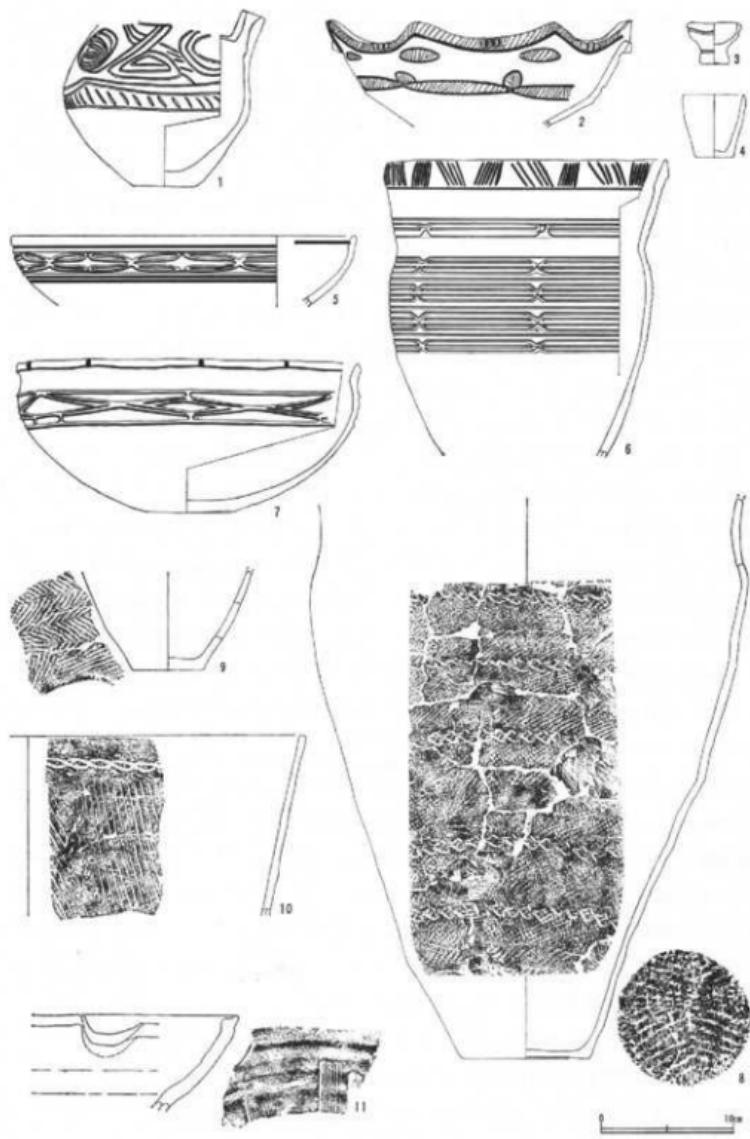
中期後葉の土器（第9図1） 本遺跡から出土した中期の土器はこの1点だけで、第1地点東側で出土した。文様は縄文地上を上下に横走する数条の半隆起線で区切っている。中期後葉のキヤリバー形の頸部と思われる。

後期前葉の土器（第8図1、第9図2～9、図版第4図1～5） 後期初頭の三十稻場式に比定される土器で、30点ほど出土している。土器は赤褐色を呈するものが多く、焼成は良好である。この中には刺突文が施されたもの（第9図2～4）、口縁が内彫し、そこに文様をえぐる縁帶文の土器（5～7）や柳状工具で曲線を施した条痕文（8・9）などがある。第8図1は注口部が上向いた注口土器で、体部は球状を呈している。文様はヘラ状工具で施され、体上半には円弧を、その下に縱長の刻目を挟んだ3条の沈線で体下半部とを切り離している。図版第4図5はヘラ書きの曲線が施文された小形の鉢形土器で、注口土器とともに関東の堀之内式の影響を受けている。図版第4図1は注口部の周囲に刺突文が施されている。

後期後葉の土器（第9図10～21、図版第4図6～8） 文様モチーフに入組文（第9図10～15）や孤線連結文（第9図16～21）を施したグループである。入組文は縄文地上を沈線で区画し磨消することによって描かれている。15は注口土器の上半部と思われ、区画線は竹管の押引きによっている。孤線連結文のグループには交点に小さな瘤が貼りつけられることが多く、孤線も縄文を残すもの（17～19）や列点（16）あるいは刻目（20・21）が加えられている。19・20は注口土器の上半部であろう。21は底面に網代痕が認められる。この所謂「コブ付土器群」は黒褐色を呈するものが多く、焼成はあまり良好とはいえない。出土量は約50点ほどである。

晩期前葉の土器 この中には大洞B式併行期の三叉文のグループ（第9図22～33、図版第4図10～12）と大洞BC式併行期の羊歯状文のグループ（第9図34～40）とに分けられる。三叉文のグループは東北の影響を受けたもの（22～28）と北陸の八日市新保式や勝木原式の影響を受けたもの（29～33）とに細分され、前者は黒褐色を、後者は茶褐色を呈している。羊歯状文のグループは黒褐色を呈し、三叉文のグループとともに焼成は良好ではなく、もろくなっている。出土量は三叉文・羊歯状文のグループとも合わせて約100点ほどで、第1地点から出土した。

晩期中葉の土器（第10図1～17、図版第4図13～19） 大洞C₁・C₂式に見られる雲形文のグループで、色調は茶褐色を呈するものが多く、焼成は良好でかたい土器である。このグループは工字文のグループと同様、本遺跡の主体をなすもので、第1・第3地点から出土している。第3地点はこのグループのみである。出土量は文様の明確なもので約100点である。



第8図 開文土器・中世陶質土器 (11)

雲形文が施されている器形は浅鉢形（第10図1～8）が多く、平口縁（1～3）や小波状の口縁（5～7）がある。第10図7は小波状口縁の浅鉢形で、口縁内外に1条の刻目文をめぐらし、外面は刻目文の下に彫刻的な雲形文をえがいている。9は口縁が外反する注口土器で、頸部は無文となっている。10は高台の破片と思われ、数条の沈線をめぐらし、その下に幅の狭い雲形文を施している。11・12は越路町朝日遺跡^(註1)にみられるもので、大洞C₁式の粗製土器と思われる。15～17はいずれも無文で15は浅鉢形、16～17は壺形土器と思われ、朝日遺跡のものに類似し、この期の所産と考えられる。13・14は口縁がやや直立する浅鉢形土器で、頸部に連続浮線横円文をもち、体部は三角形の磨消縄文が施されており、関東の杉田C類に類似している。

晩期後葉の土器（第8図5～8、第10図18～27、第11図1～9、図版第4図20～26）　このグループは大洞A式併行期のもので、中葉の土器と同じく本遺跡の主体をなしている。第1・第2地点からの出土が多く、明らかにこのグループに属するものは約120点を数えた。第8図5は彫刻的手法による浮線工字文が施された浅鉢形土器で、内面にも1条の沈線がめぐっている。第8図6は口縁が外反し、頸部がくびれる深鉢形土器で、口縁に縱長の刻目文を、頸部に1組の工字文、体部に4組の工字文が施されている。体部の各工字文は1条の沈線によって区画されている。第8図7は長野県永I式にみられる菱形の浮線文が施されており、体部との境は削り出されたままで、沈線をめぐらした第8図5とは様相を異にしている。この土器は第8図8の中に口縁を下にしてかぶさって出土した。8は頸部がくびれた壺形土器で、体部は綾絹縄文が施文され、底面にはくずれた網代痕がみられる。後葉の土器にはこれらの他に肥厚した口縁部に沈線を引いたもの（第11図5）、口唇部の沈線を工字文風にしたもの（6・7）、口縁を直角に外反したもの（8）や山形口縁の内外面に彫刻的手法を加えたもの（9）などがある。色調・焼成は個性的であり、器面に朱を施したものもある。

小形土器（第8図3・4、図版第4図27・28）　繩文後期からよくみられる小形の土器で、3は口縁と底部に1条の沈線が、4は無文である。いざれも第1地点出土のものである。

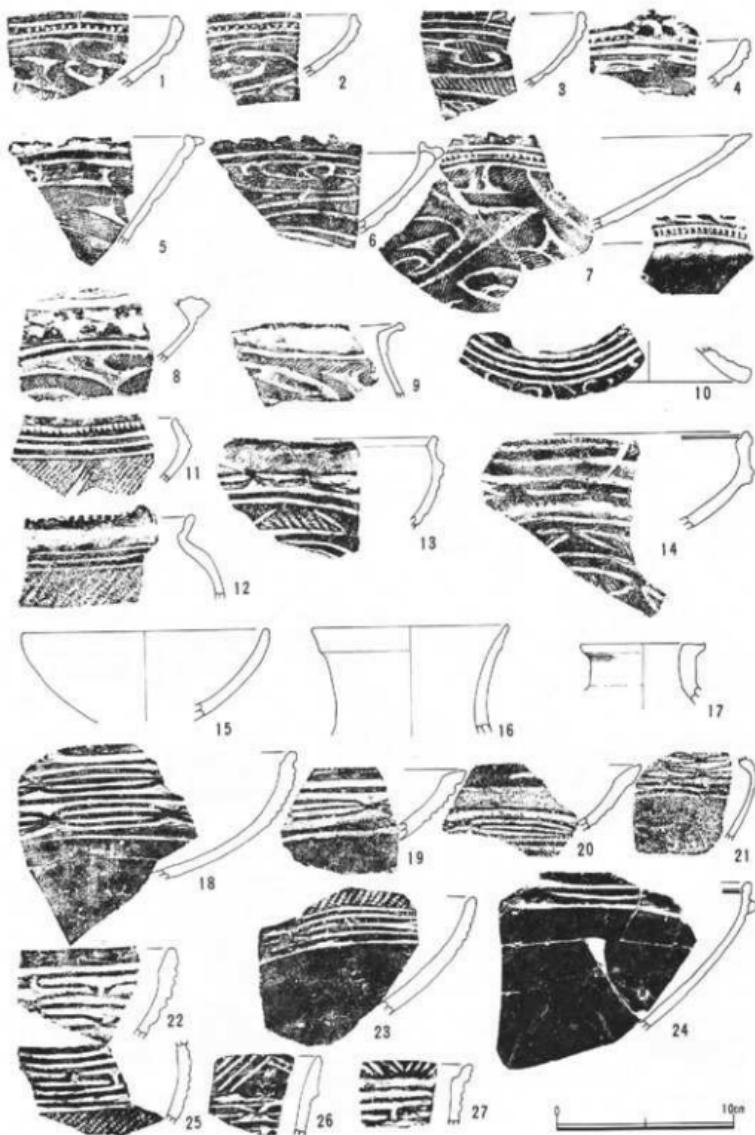
粗製土器（第8図9・10、第11図11～23、図版第4図29～40）　器面全体に繩文などを施した深鉢形土器で、所謂粗製土器と呼ばれるグループである。この中でも口縁に1条あるいは体部に数条の綾絹縄文が施文されたものが多く、それらは網状撚糸文（第11図14・24）、撚糸文（第8図10、第11図20）や繩文（第11図11・13・15～18）と組合されている。第11図30・31は貝殻条痕が施文され、29は複合口縁上に貝殻条痕文が施文されている。

多孔底土器（第11図34・35、図版第4図41）　底部に孔があげられているもので、後期に多く出土している。34は丸底で現孔3個を数える。35は現孔3個の平底で一般的なものである。

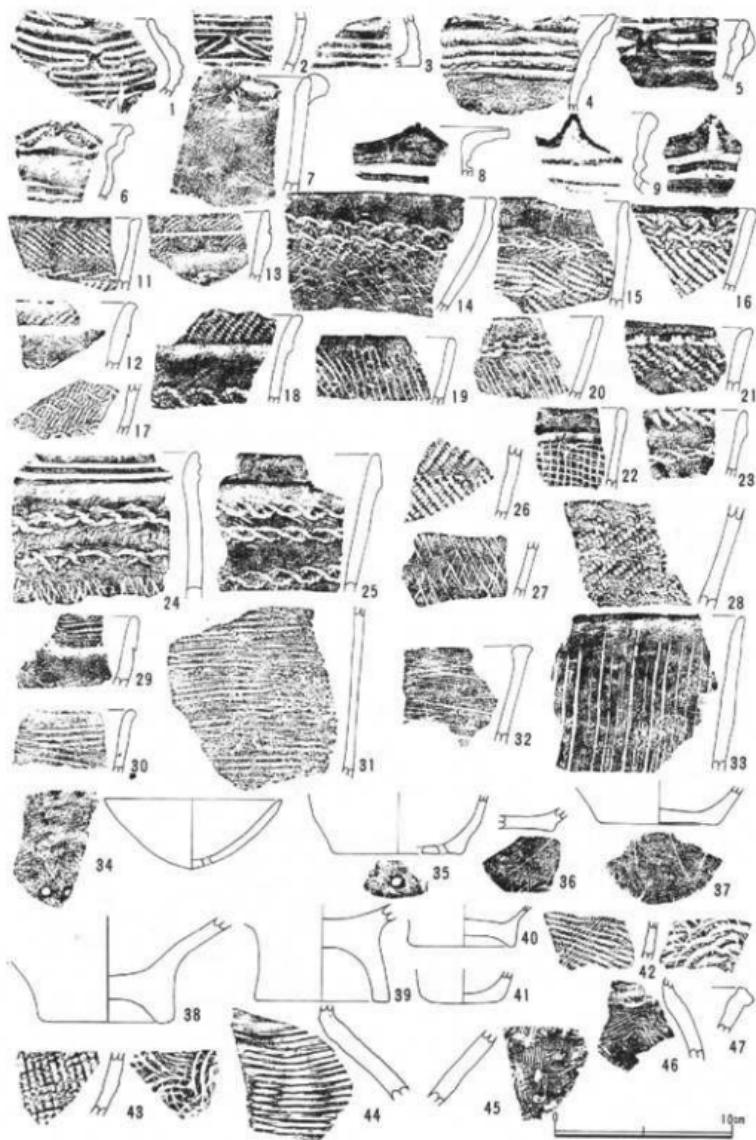
繩文土器の底部（第11図36～41、図版第4図42・43）　本遺跡からは多くの底部が出土したが、ここには特異な例をあげた。これから器形の推定は困難であった。36・37は底面に木葉痕が、38～40はあげ底ないしは高台の底部で、41は小形の底部である。



第9図 桐文土器



第10図 調文土器



第11図 繩文土器(1~41)・須恵器(42~43)・中世陶質土器(44~47)

(2) 土製品（第13図1・2、図版第5図1～4） 本遺跡からは土偶の左足部（図版第5図1）と耳栓（第13図1・2）それと男根の亀頭部を表現した土棒（図版第5図4）が出土した。

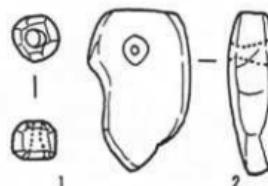
(3) 石製品（第12図、図版第5図5～11） 本遺跡出土の石製品には小玉（第12図1）と勾玉（第12図2）と石棒（図版第5図7～11）がある。石棒は亀頭部をえぐり込んだものが多い。

(4) 石器（第13図3～20、図版第5図12～33） 本遺跡から50点をこえる多種類の石鎌が出土し、県内における晩期の普遍的な在り方を示していた。第13図14は両頭石斧で独鉢石と通称されている。15～20は板状石器で、石匙は出土しなかった。この他大形の石鎌（図版第5図29）が出土している。図版第5図31・32は小形の石皿である。

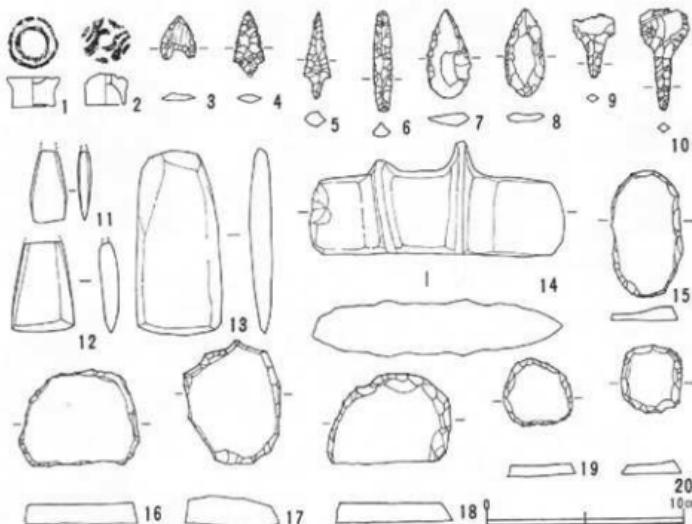
(5) 須恵器（第11図42・43） 第1地点の中央部より出土した。内面に青海波文がみられる。

(6) 中世陶質土器（第8図11、第11図44～47） 図示した珠洲系土器の他に、越前系土器も出土した。第8図11は片口の擂鉢で、第11図46は波状文の壺と思われる。 (鉢形破片)

註1. 中村孝三郎他「朝日遺跡調査報告書」越路町教育委員会 昭和40年



第12図 玉類 (J.)



第13図 土 製 品 ・ 石 器

5. まとめ

本遺跡は昭和26年12月長岡市立科学博物館が館として最初の発掘調査を行った地であり、その報文は寺村光晴によって発表されている。^(註1)博物館の調査は遺跡の一部にすぎず、遺跡全体を対象としたのは今回が初めてである。我々は遺跡の規模・内容等を把握することを目的に試掘調査を実施した。この結果、前に述べたとおりいくつかのことが明らかになった。ここで改めて、それらを振り返ることにより、本書のまとめとしたい。

本遺跡出土土器量は平箱で約65箱を数え、そのほとんどが縄文土器であった。この他、須恵器や中世陶質土器等が少量ながら出土した。縄文土器は第1～第4地点（第1図）に分布しており、後期の三十種場式、後期後葉の塔ヶ峰式それに晚期全般のものがあった。^(註2)後期後葉の塔ヶ峰式には、安孫子昭二のコブ付土器第1段階に相当する入組文の土器と、第2段階の貼瘤の孤線連絡文とに細分される。晚期の土器は東北の大洞B～A式に至る各期の土器が認められ、その主体はC₁あるいはC₂の雲形文の土器とA式の工字文の土器である。大洞B式併行期の三叉文のグループに第9図29～33の山形口縁の下に三叉文風の文様を施したものも含めたが、本県に対比資料が見当たらず、この時期に入るのか否かについて疑問が残る。皆様の御教示を得たい。なお、三十種場式は第1図第4地点、塔ヶ峰式は第1地点東側に限られて分布し、第1地点は晚期全般、第2地点は大洞A式、第3地点には大洞C₁・C₂式が出土した。このことは時代が新しくなるにつれて、沖積地から山林地帯へと生活の空間を狭いながらも移動したことを物語っていると思われる。

遺構は第1地点で無数のピットの平面プランが確認され、第2地点で、縄文晚期の住居址と中世の溝が発見された。住居址は周壁・周溝がなく、従来の竪穴式住居址とは異なる。竪穴式住居であれば、周溝が認められることが多く、本住居址は竪穴式に近い他の様式と思考される。ピットは地表面に径50～80cmの炭化物が混入された円形の黒色土をもって推定した。ピットは第1号住居址のような法則性を見出せず、密集して検出され、その性格は不明である。第1地点におけるピットの分布は（45～70、65～80）とY軸40以東それにY軸108以西は空白あるいはまばらで、他の地域には密集しており、北東に開いた環状になっていた。このことから、ピットの性格は別としても第1地点が大集落か墓地と考えられるが、近くに該期の集落が存在しないことから、第1地点そのものが、環状の集落址とみる方がより妥当であろう。

以上のことから、本遺跡は縄文後期から晚期に至る長期間に先史時代の人々が第4地点から第1地点へと、居を移動しながら生活を営んでいたことが推測され、さらに中世になってからも人々が生活していたことが判明した。

（鈴木敏郎）

註1 中村孝三郎「先史時代と長岡の遺跡」長岡科学博物館 昭和44年

註2 寺村光晴「新潟県三島郡藤橋の遺跡」上代文化第26号 昭和31年

註3 安孫子昭二「東北地方における縄文後期後半の土器様式」石器時代第9号 昭和44年

IV 尾立遺跡

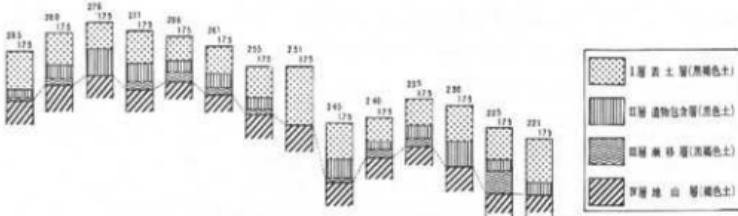
1. 調査の経過

本遺跡の試掘調査対象地は(220~300, 100~200)で、調査は $10 \times 10m$ に $2 \times 2m$ のグリッドを発掘し、遺構・遺物の発見に努めた。これにより、遺物の分布は第1図のように一定の規模をもって集中していることが判明し、これを本遺跡の範囲と考えた。また、本遺跡では弥生土器を伴った住居址が検出したため、遺跡の西半分をより詳細に発掘し、その様相をさぐることにした。この結果、住居址が1基、建物址4基それに土括が2基発見された。これらの住居址・建物址は南北に配列しており、集落構成の1部がわかった(第15図)。(寺崎裕助)

2. 土層

本遺跡の基本土層は藤橋遺跡の場合と同じく4層に分れていた。本遺跡のⅡ層は土層厚に多少の変化はあるが、遺跡全体にわたって分布していた。しかもX軸の221~240・251~285、Y軸181以東で厚くなり、遺構・遺物の検出状況とほぼ一致し、遺跡の東側にいくにつれてⅡ層は厚く、遺物量も増加していく。

(寺崎裕助)

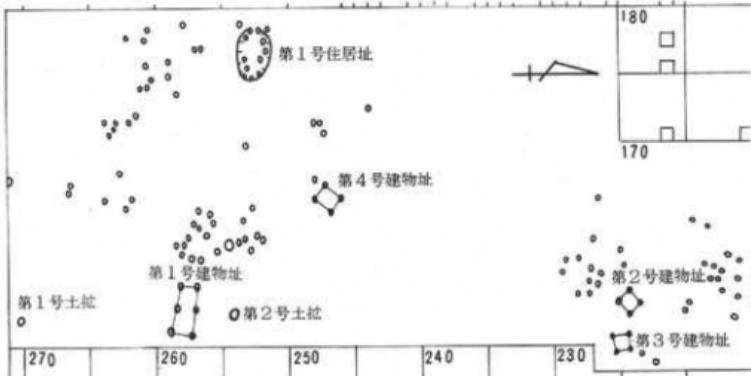


第14図 土層柱状図

3. 遺構

本遺跡においては、竪穴住居又は平地住居と考えられる住居址1基、ピットの配列により建物址と考えられるもの4基、土塹2基及び無数のピットが発見された。遺構は(245~265, 156~180)や(215~230, 156~165)に集中して発見されたが、(230~245, 156~180)では遺構は検出されず広場的な要素をもつものと考えられる。遺物も遺構の検出された区域でその大半が出土している(第15図)。

(1) 第1号住居址(第16図、図版第7図) 遺跡西側の(252~254, 175~179)に位置し、平面プランは長径7m、短径5mの長辺円形を呈し主軸方向はN87°Wである。周溝は北側の一部分をのぞいてめぐっており巾30cm、地山面よりの深さ7cmを測る。床部分の地山層は住居址外のそれと同一状態を示し、住居址の東端と西端では地山面の高低差が約40cmあり、地山面を床面として認定するには疑問が生じる。よって床面は黒色土中に求めることができるのはなかろうかと推定される。炉址は発見されなかったが、ピットは14基検出され、そのうち周溝にそってめぐっている11基のピット($P_1 \sim P_{11}$)は直径約50~60cm、深さ100cmを測り柱穴と考えられる。本住居址からは縄文土器、弥生土器、滑石製石製品(図版第11図45)が出土している。縄文土器には台付土器(第23図3)、縄文又は条痕文の施されている深鉢形土器(第24図1~8)があり、弥生土器には櫛横文の施されている變形土器(第23図1、第24図9~10、図版第9図1)、磨消縄文、櫛描文、沈線文が施されている壹形土器(第23図2、第24図11~16・19・20、図版第9図2)がある。第23図1は口縁が外反し口径31cm(推定)を測る變形土器である。口縁部には4本歯の櫛状工具によって連続扇形波状文がめぐらされている。胴部には条痕文が施されており、胴下半部には内外面とも炭化物の付着が認められる。第23図2は最大径が

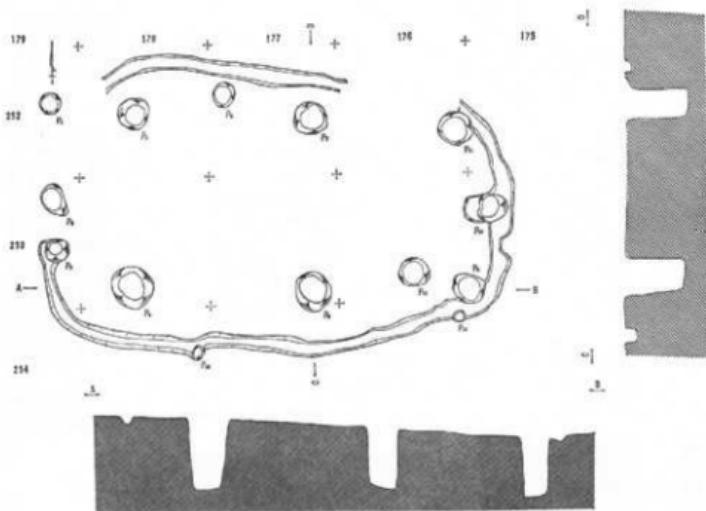


第15図 遺構配列図(1:1000)

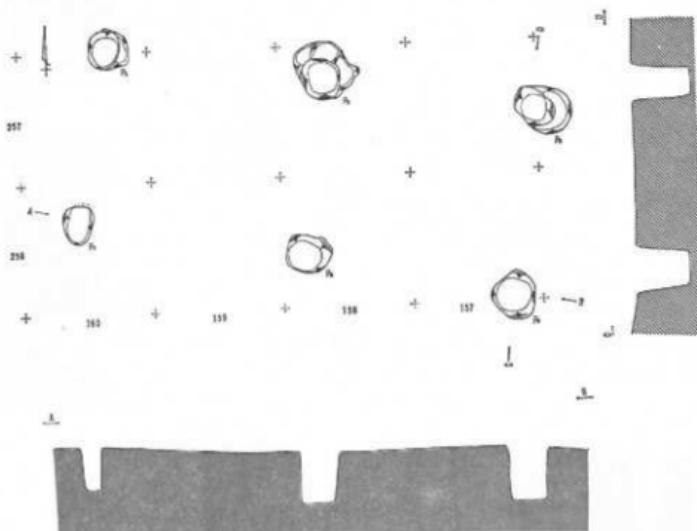
胴部中央にあると推定される壺形土器で、頭部には3条の沈線がめぐり、その中には無節縄文が施され、縄文が磨消された部分は塗朱されている。胴部には条痕文が施されている。第24図20は磨消縄文が施され、縄文部分が塗朱されており、六野瀬遺跡YⅡ式土器に類例を求めることができよう。

(2) 第1号建物址(第17図、図版第8図) 遺跡南側の(256~259, 156~160)に6基のビットが検出された。これらのビットは直径約70~80cm、地山面からの深さ約80~90cmを測る。ビット間隔(cm)はP₁~340-P₃-332-P₅, P₃-352-P₄-332-P₆, P₁-268-P₂, P₃-272-P₄, P₅-288-P₆で、主軸方向はN 78°Wを示し、東西6.8m、南北2.8mの規模をもつ。このことからP₁~P₆は1間×2間の建物址の柱穴と考えられる。遺物は柱穴の壁に密着して少量出土しており、柱の根固めに使用された可能性もうかがえる。土器は第1号住居址と同じく縄文土器と弥生土器が出土している。縄文土器には変形工字文が施されている深鉢形土器(第23図5、第24図23・24、図版第9図5)、結束縄文、条痕文が施されている深鉢形土器(第24図17・18・22・25)があり、弥生土器には柳描文の施されている變形土器(第23図4、図版第9図4)、磨消縄文が施されている壺形土器(第24図21)がみられる。第23図4は推定口径15cmを測り、3本歯の柳状工具による直線文と連続扇形波状文が施されている變形土器である。表面全体には炭化物が厚く付着している。第23図5は推定口径15cmを測る深鉢形土器であり、彫刻的な手法で隆線的な変形工字文が施されている。表面に炭化物の付着が認められる。

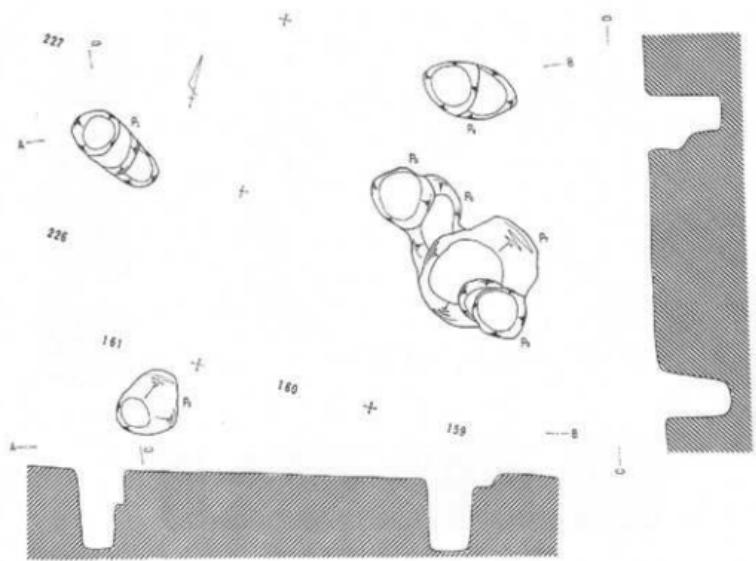
(3) 第2号建物址(第18図) 遺跡北東側の(225~227, 159~161)では7基のビットが検出された。そのうち4基のビット(P₁~P₄)は直径約50~60cm、地山面からの深さ約70~80cmを測る。ビット間隔(cm)はP₁-320-P₂, P₂-424-P₃, P₃-260-P₄, P₄-404-P₁で主軸方向はN 68°Eを示し、東西約4m、南北約3.2mの規模をもつ。このことからP₁~P₄は建物址の柱穴と考えられる。しかし、P₂とP₄をほぼ結ぶ線上に位置し、直径約70cm、地山面からの深さ約50cmを測るP₅からはほぼ完形に近い縄文土器が1個体出土しており、住居址に伴う貯蔵穴及びそれに類似するビットと推定される。それゆえ、第2号建物址は炉址、周溝等の内部施設は発見されなかつたが、4柱穴1ビットを1単位とする堅穴もしくは平地住居址の柱穴及びビットのみが残存したものと推定できるのではないかろうか。第23図6・図版第9図3はP₅から出土した口径24cmを測る深鉢形土器で器面全体に条痕文が施されており、口唇部には刺突文が認められる。表面全体と裏面の底部付近には炭化物が厚く付着している。



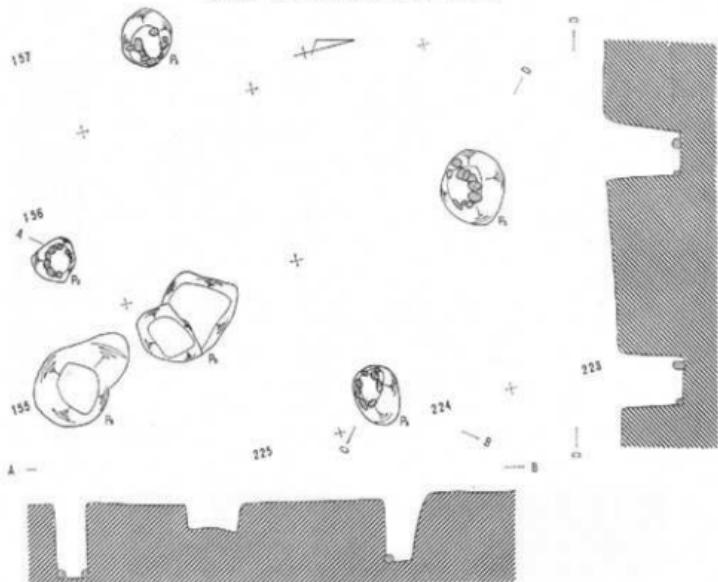
第16圖 第1号住居址実測図 (1:80)



第17圖 第1号建物址実測図 (1:80)



第18圖 第2号建物址実測図 (1:60)

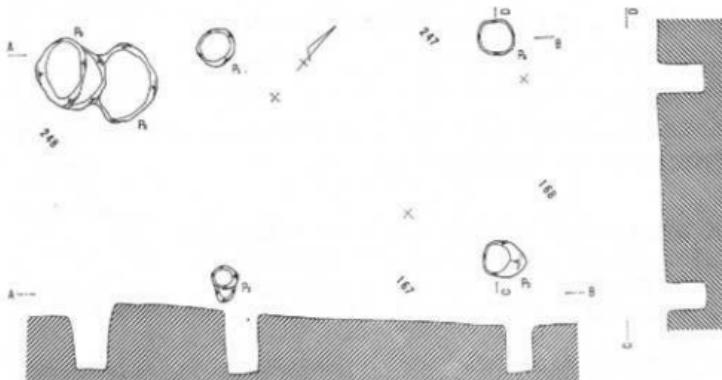


第19圖 第3号建物址実測図 (1:60)

(4) 第3号建物址（第19図、図版第8図） 第2号建物址の東側約4mの(226~228, 155~157)で6基のピットが検出された。そのうち4基（P₁~P₄）は直径約50~90cm、深さ約80~90cmを測り、基底部に直径10cm前後の礫を8~10個環状におかれていた。この礫は柱の根固めに使用されたと考えられ、P₁~P₄は柱穴と推測される。ピット間隔(cm)はP₁~268~P₂, P₂~380~P₄, P₃~248~P₄, P₃~392~P₁で主軸方向はN37°Eを示す。P₅はP₂とP₄を結ぶ線上に位置し、長辺約1m、短辺約60cm、地山面からの深さ28cmを測る。P₆は他の柱穴に比較して、根固め石がなく、深度や平面形態も異っており、柱穴とみることはできない。むしろ、柱穴線上にあることや形態等から第2号建物址のP₅に近い性質をもつピットと思われる。それゆえP₁~P₆のピット群も第2号建物址と同じく4柱穴1ピットを1単位とする堅穴又は平地住居址の柱穴及びピットのみが残存したものと推定できるのではないかと思われる。出土遺物は柱穴内より土器の小破片が若干出土している。

(5) 第4号建物址（第20図） 遺跡西側の(246~248, 165~167)で6基のピットが検出された。そのうちの4基（P₁~P₄）は直径約40cm、地山面からの深さ約40~60cmを測り、ピット間隔(cm)はP₁~260~P₂, P₂~308~P₃, P₃~248~P₄, P₄~312~P₁で主軸方向はN50°Eを示し、約3.2m×2.6mの規模をもつ。このことからP₁~P₄は1間×1間の建物址の柱穴と考えられる。出土遺物は柱穴内より土器の小破片が若干出土している。

(6) 第1号土括（第21図） 遺跡南側の(271, 157~158)に位置する。直径約1mの円形を呈し、深さは約20cmで、断面皿状を呈する。土括内部からは第1号住居址、第1号建物址にみられるように縄文土器と弥生土器が出土している。縄文土器には工字文の描かれた浅鉢形土器（第23図7、図版第9図6）、条痕文、縄文、結束縄文、無文の深鉢形土器（第23図8・10、第



第20図 第4号建物址実測図 (1:60)

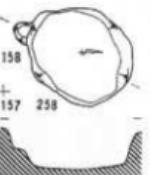
24図26~30)があり、弥生土器としては無文の壺形土器(第23図9、図版第10図4)が出土している。石器としては石錐(図版第11図43)が1点出土している。第23図7は推定口径21cmを測る浅鉢形土器である。口縁部には彫刻的な手法で変形工字文が描かれており、内側にも1条の沈線がめぐらしている。胴部には縦文が施されている。第23図10は6単位の小波状口縁をもつと推定され、胴部が少し張り出す深鉢形土器である。推定口径34cmを測る。器面全体にLRの単節縦文が施されており、外面全体に炭化物が付着している。第23図9は胴部中央に最大径を持ち、無文であるが丁寧に器面調整がなされている。器厚はうすく、焼成、胎土も良好であり、本遺構出土の縄文土器とは一見して異なる様相を呈している。

(7) 第2号土塹(第22図) 第1号建物址近くの(254、157~158)に位置する。長径1.2m、短径1mの橢円形を呈し、深さは約40cmを測る。土塹内部からは直径約10~15cmの円碟及び角碟が10数個出土したのみで他の遺物は認められなかった。

(8) ピット群 遺跡南西部~北東部にかけて直径約40~50cm、地山面からの深さ約50~60cmあまりを測るピットが無数に検出された。これらのピット群は配列に規則性がなく住居址などとしては把握できなかつたが、第1号建物址の柱穴等にみられるように内部から柱の根固めに使用されたと推定される縄文土器及び弥生土器が出土しており、やはり住居址などの柱穴と考えられるのではないかろうか。縄文土器には変形工字文の施された深鉢形土器(第23図11・12、第24図39・40、図版第10図2・3)と縄文、結束縄文、網目状撚糸文、条痕文が施されている深鉢形土器(第23図14、第24図31~38・41・42)があり、弥生土器には沈線によって直・曲線、山形文が描かれている壺形土器(第23図13、第24図43・44)がある。第23図11は4単位の波状口縁をもつと推定され、胴部が少し張り出す器形を呈し、胴部に沈線で変形工字文が描かれている。第23図12は筒形土器の底部破片で、底径4cmを測り、底部付近には沈線によって変形工字文が描かれている。両者とも器面全体に炭化物の付着が認められる。第23図13の胎土は砂質でもろく、色調は赤褐色を呈し、他の弥生土器とは異なっている。第23図14は外面全体に炭化物が厚く付着しており、胎土中には径1mm~2mmの小石を含んでいる。



第21図 第1号土塹
実測図 (1:60)



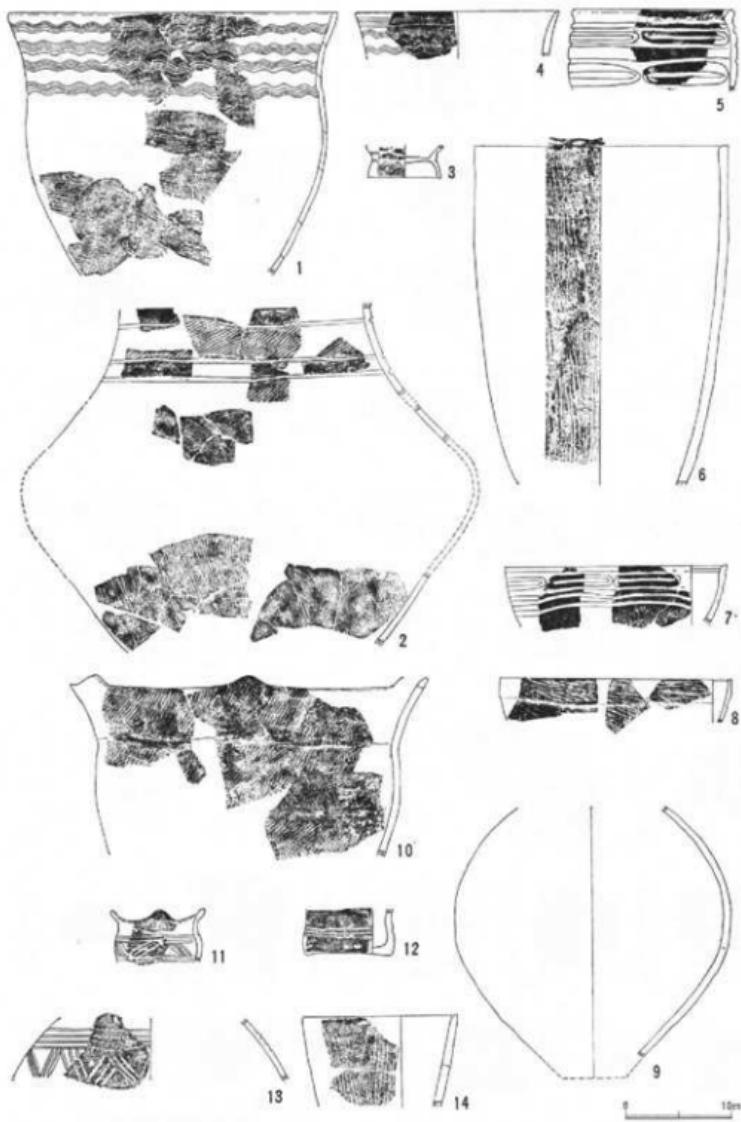
第22図 第2号土塹
実測図 (1:60)

註1 柱穴と考えられるピットが規則性をもって配列されている遺構が検出された。堅穴又は平地住居址の柱穴部分の残存か高床式住居の柱穴かは現時点ではまだ断定が困難であるゆえ建物址という表現を用いた。

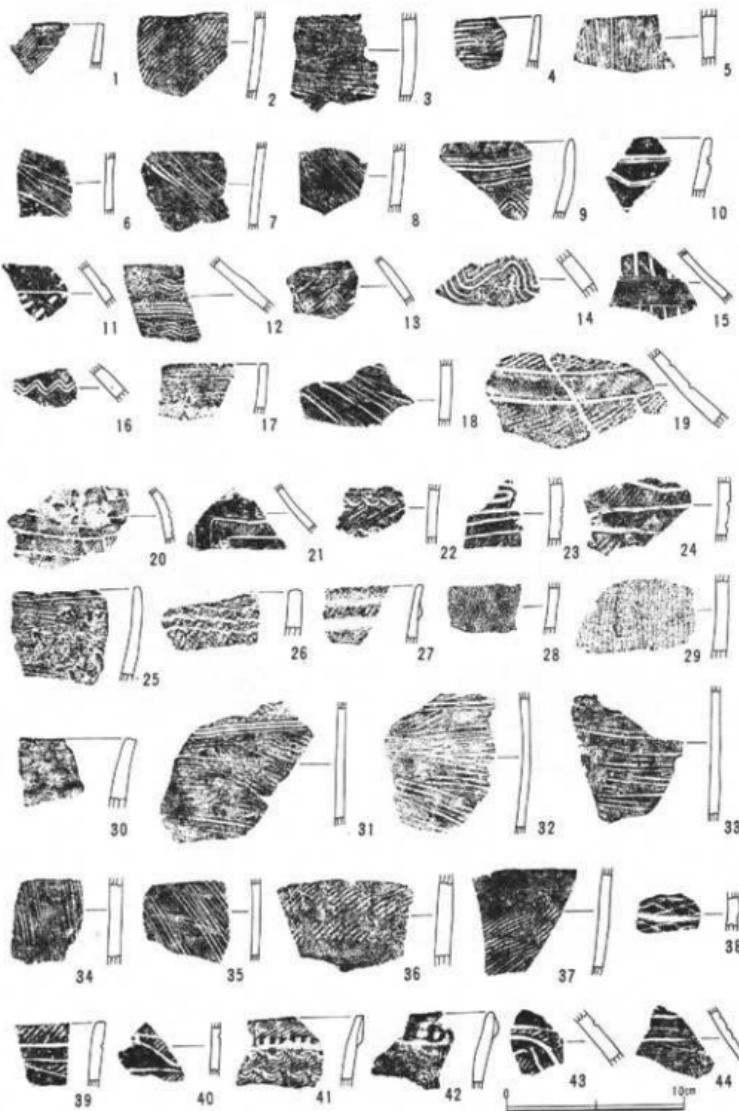
註2 杉原莊介「新潟県、六野瀬遺跡の調査」考古学集刊第4巻第一号 昭和43年

註3 地山面付近からは土器等の遺物は発見されず、地表面から地山面までの深度も30~40cmと浅い。炉址、周溝等の施設及び床は黒色土中に設けられたが後世の擾乱等によって破壊されたものと考えたい。

(寺崎裕助)



第23図 遺構出土土器



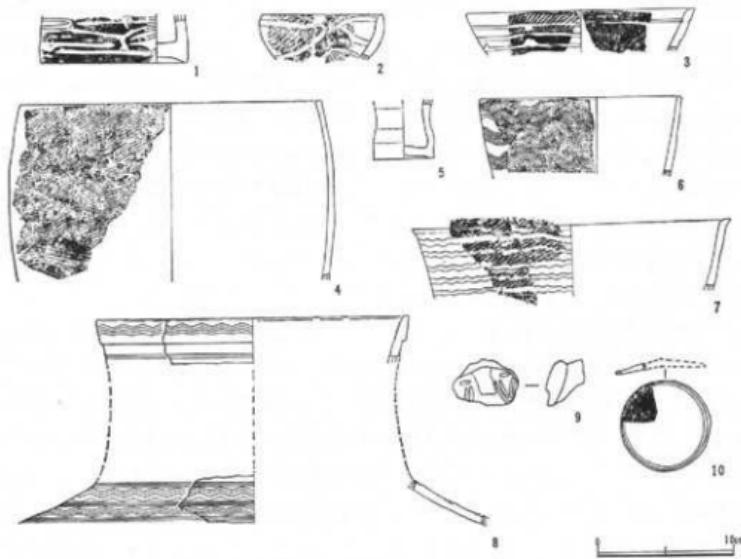
第24図 造構出土土器

4. 遺物

本調査で出土した遺物は縄文土器、弥生土器と石斧、石鎌等の石器類で、平箱にして約10箱程度であった。そのうち石器はきわめて少量であり、土器がほとんどをしめている。土器は縄文土器と弥生土器が出土しており、その多くは小破片で器形・文様の全容を知ることのできるものは少なかった。しかし、できる限り器形・文様の推定復元につとめ、土器の分類を次のようにした。まず器形で大別し、それをさらに文様によって細別することとした。

(1) 縄文土器

深鉢形土器 深鉢形土器には平口縁・波状口縁・胴部が張るものなど器形の細部に変化がみられるが、資料が少ないため一括し、文様によって、変形工字文が描かれているもの（第23図5・7・11・12、第25図1、第26図1～7、図版第9図5、図版第10図6・7）、縄文地上に沈線で直・曲線が描かれているもの（第26図8・9、図版第10図8）、細い半隆帯によって直曲線が描かれているもの（第26図25、図版第10図16）、縄文、結束縄文、網目状撚糸文を施したもの（第23図10・14、第26図10～14・23・24、図版第10図1・9・17）、条痕文が施されているもの（第23図6・8、第26図15～20、図版第9図3、図版第10図11・12）、縄文と条痕文が施されているもの（第25図4、第26図21、図版第10図10）、無文のもの（第25図5）に細分した。



第25図 縄文土器(1～5)・弥生土器(6～10)

第25図1は東北南部から関東北部にかけての縄文晩期終末期及び弥生中期にみられる筒形土器に類似するものと思われる。第26図5は愛知県西志賀貝塚出土の土器にその類例が求められるものであり、東海地方の系統をひく土器かもしれない。

浅鉢形土器（第23図7、第25図2・3、図版第9図6、図版第10図13・14） 变形工字文が施されているもののみであり、3は内外面とも口縁部下1.5cmまで塗朱されている。

台付土器（第23図3） 底部付近に2条の沈線がめぐり、地文に縄文が施されている。

（2）弥生土器

変形土器 縄文土器の深鉢形土器に類似するような器形も認められるが変形土器として一括し、文様によって横描文が施されているもの（第23図1・4、第25図6、第26図26、図版第9図1・4、図版第11図1）、沈線によって直線文、波状文が描かれているもの（第25図7、第26図27、図版第11図2・3）に2分される。第25図6は口縁部に7本歯の櫛状工具による連続扇形波状文が3条めぐっており、推定口径7.5cmを測る。第25図7・第26図27は県下および周辺地域に類例がみられない土器であり、竹管を押し引きするような沈線で直線文及び波状文が描かれている。第25図7は口唇部にも縄文が施されている。

壺形土器 最大径が胴部中央又は胴部上半に位置する器形が推定されるが、資料が断片的なため壺形土器として一括し、文様によって横描文が施されているもの（第25図8、第26図28～34、図版第11図4～14）、沈線によって直線文、山形文が描かれているもの（第23図13、第26図35～40、図版第11図15～20）、磨消縄文の施されているもの（第23図2、第24図19～21、図版第9図2）、顔壺と推定されるもの（第26図9、図版第11図21）、無文のもの（第23図9、図版第9図4）に細分される。第25図8は推定口径23cmを測る大型の壺形土器と推定される。口縁部には3本歯の櫛状工具で山形波状文が、胴部上半には口縁部の山形波状文と同一工具で施文された直線文が描かれており、この類例は群馬県岩櫃山遺跡A類土器にうかがわれる。^(註2) 第25図9は顔壺の口頭部に付けられた顔面と推測されるものであり、鼻の部分は欠落しているが、目は沈線で表わされている。眼下の2条の曲線も沈線で描かれ、塗朱されている。

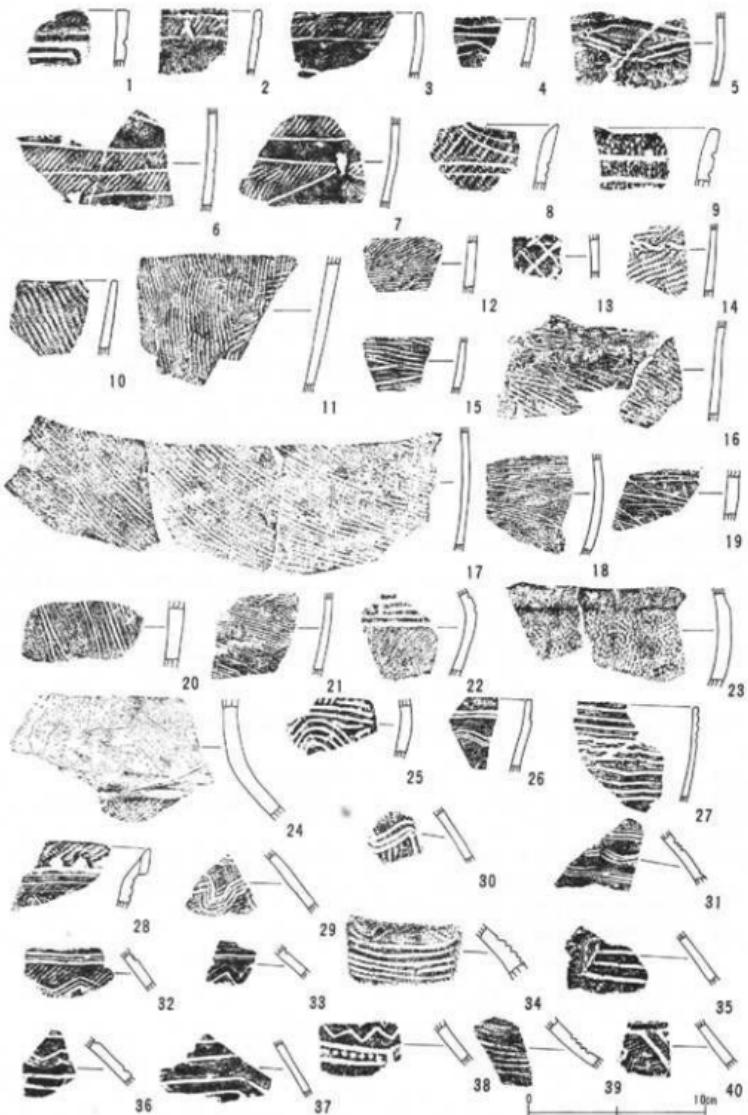
蓋 第25図10は表面全体に細い縄文が施されており、縁部には他の土器に例をみない1条の沈線がめぐっており、蓋の一部分ではないかと推定される。推定直径3.5cmを測る。

（3）石器 石器の出土量は少なく磨製石斧2（図版第11図22・23）、打製石斧1（図版第11図24）、蔽石1（図版第11図25）、凹石1（図版第11図26）、磨石4（図版第11図27～30）、石鏃12（図版第11図31～42）、スクレイバー1（図版第11図44）等の計26点のみであった。石鏃には有茎、ポイント状の2形態が認められ、石質も頁岩または安山岩と推定されるものが主体を占めており、黒耀石製のものは発見されなかった。

（寺崎裕助）

註1 紅村弘「西志賀貝塚出土の一土器について」考古学集刊第三冊 昭和24年

註2 杉原莊介「群馬県岩櫃山における弥生時代の墓址」考古学集刊第3卷4号 昭和43年



第26図 繩文土器(1~25)・弥生土器(26~40)

5. ま と め

(1) 土器について 本遺跡からは縄文土器と弥生土器が出土している。縄文土器には変形工字文が施された精製の深鉢形土器及び浅鉢形土器の1群と縄文、結束縄文、網目状然糸文、条痕文等を施した粗製深鉢形土器の1群がある。変形工字文は県下において縦立遺跡A群土器、六野瀬遺跡^(註1)J式土器、擂山遺跡^(註2)出土の土器等に認められる。これらの遺跡の変形工字文が施されている土器は磯崎正彦によって縄文時代晚期終末期（大洞A'式）に位置づけられており、本遺跡のそれもほぼこの時期に比定されよう。弥生土器には菱形土器、壺形土器があり、それらに横描文、沈線文、磨消縄文が施されている。横描文には波状文と直線文があり、その中の連続扇形波状文は県下では発見されていない。この類例を他県に求めれば、富山県石塚遺跡第Ⅰ期の第Ⅱ様式の影響をうけた時期とされており、^(註3)本遺跡の連続扇形波状文の土器及びそれに伴う弥生土器は畿内第Ⅱ様式とはほぼ同時期—中期前半に位置づけることが可能であろう。これらの縄文土器と弥生土器は第1号住居址、第1号建物址、第1号土括等の出土例で明らかなように、同じ遺構内から出土しており、この事実によれば晚期最終末期（大洞A'式）の縄文土器と中期前半の弥生土器が時間差をなくして存在していたと考えられる。また、このことは縄文土器の器形には弥生土器にある壺形土器が、弥生土器には縄文土器にみられる浅鉢形土器がなく、系統の異なる2種類の土器がそれぞれのもつてない器形を互いにおぎなってひとつの土器セットをなしていたのではないかと推測され、この現象からも裏づけられよう。以上のようなことから、尾立遺跡出土の土器は縄文時代から弥生時代への移行期に位置づけることができよう。

（寺崎裕祐）

註1 磯崎正彦・上原甲子郎「亀ヶ岡式文化の外殻層における終末期の土器型式」石器時代第9号 昭和44年

註2 杉原莊介「新潟県、六野瀬遺跡の調査」考古学集刊第4巻第1号 昭和43年

註3 上原甲子郎「新潟県擂山遺跡調査の概要」日本考古学協会第24回総会研究発表要旨 昭和34年

註4 註1と同じ

註5 関雅之の「新潟県における横目文土器の問題」（信濃第22巻第4号）によれば新潟県下で横描文を出土する主要遺跡はおよそ11カ所を数える。しかし、それらの遺跡の土器にみられる横描文はほとんどが小刻みな波状文であり、連続扇形波状文は認められない。

註6 上野章「弥生時代、付古式土器」富山県史考古編 昭和47年

(2) 造構について 本遺跡で発見された造構は住居址が1基、建物址が4基それに土塹が2基である。住居址は周溝と柱穴によって確認され、周壁や炉址を伴っていないかった。このため第1号住居址が竪穴式住居であるかどうかの疑問が残る。建物址はいざれも柱間寸法やプランに一定の法則が認められたもので、第1号は1間×2間、第2～第4号は1間×1間である。第1号建物址は6基の柱穴が独立して存在し、柱間寸法が2.7mと3.4mに集約されるところから掘立柱式に近い建物址と考えた。第2・第4号建物址は第3号建物址の柱穴に根固め石が一方をあけた状態で配列されており、この根固め石の柱穴を結ぶと柱間寸法が約3.8m×2.4mで方形プランを呈し、第3号建物址を掘立柱式に近いものと考え、この法則を第2・第4号建物址にあてはめ、これらも建物址と考えた。これらの建物址は周溝・周壁それに炉をもっていないことからも、より掘立柱式に近いものとの感を受けた。弥生時代で掘立柱式の建物址が発見された代表例に静岡県登呂遺跡や兵庫県田能遺跡の倉庫址があげられる。この他福島県天王山遺跡で無数の穴が発見され、坪井清足はこのことについて「貯蔵穴とも祭祀遺跡とも認めにくく、やはり一般的な集落が営まれていたと考える方が、より妥当ではないかと思う」と述べており⁽⁸⁾、本遺跡のピット群も一般的な集落の建物とみることができるのでないかと考えられる。また、第1号住居址もP4・P5・P7・P8・P9・P11を方形に結ぶと柱間寸法が2.4～2.8mになり、炉や周壁をもたないところから、建物址の想定も浮んでくる。なお、第2～第4号建物址は登呂や田能の倉庫址に近いものと考えられる。第1号建物址の性格は不明である。

土塹は無文の變形土器を出土した第1号土塹と、礫が入っていた第2号土塹がある。第1号土塹は變形土器が埋置され、土器を更棺としてみると、土塹墓と考えることができるのでないか。

(鉢形敏朗)

註 坪井清足「福島県天王山遺跡の弥生土器」史林第36巻1号 昭和25年

なお、寺崎裕助は第1～第4号建物址の性格について、Ⅱ層黒色土中に床面・周溝・周壁があり竪穴式住居址ではないかと考えている。

(3) 試掘について 本遺跡は古くから弥生土器が採集されることで知られており、昭和50年8月長岡市立科学博物館で1部を発掘している。本調査は昭和50年の発掘箇所を除いた地域で実施した。この結果、第1図にみられるような範囲で遺物が分布し、当時の生活の場であったと考えられる。また、遺跡東西半分ではあるが、第15図のように住居址や建物址が5基並んで発見され、集落址の様相を呈していた。東半分は昭和50年に1部発掘したところであり、詳細な調査を行なわないため、全容は把握できなかった。本遺跡からは縄文大洞A'式の変形工文字と西日本の弥生土器の影響を受けた櫛描文が同じ遺構から伴出し、しかも互いに欠いている器形を補ってひとつの土器セットをなしていた。これらのことから、本遺跡は縄文時代から弥生時代への移行期にあたり、東日本の伝統的な文化と西日本の進歩的な文化とが融合し、尾立遺跡の文化を生み出していったものと思われる。

(鉢形敏朗)

V 旧富岡農学校跡遺跡

本遺跡は弥生時代後期の柳目文土器や石劍・管玉等が採集され、尾立遺跡に続くものと知られていた。今回の試掘調査は遺物採集地点を中心に（380～430, 25～60）の範囲を対象地として実施した。調査は $20 \times 20m$ に1グリッドを設定し、牧草地等の発掘可能地を発掘した。しかし、本遺跡は過去数回にわたる土地改良の影響を受けていたため、土層は地山を含め擾乱され、（401, 30）では表土下1mの地山面まで、黒色土と地山の黄褐色土が入り混っていた。また、遺物は発見されず、遺構も確認できなかった。これらのことから、本遺跡は過去において、消滅したものとみなされるであろう。

（駒形敏朗）

註 中村孝三郎「先史時代と長岡の遺跡」長岡科学博物館 昭和44年

あとがき

東山連峰をはじめ、新潟平野を洋々と流れる信濃川を一望できますこの藤橋の台地に試掘調査のメスが入れられましたのは、まだ根雪の残る春3月のことでした。

それから約半年、時折、寒気をともなって襲来しましたみぞれやあらが舞うなかでのボーリング調査、真夏の太陽の下での発掘作業は調査にあたられた方々にとりまして、心身ともに疲れはてさせてさせたことと思われます。このような悪条件が重なりましたにもかかわらず、関係者の深いご理解とご協力によりまして、藤橋・尾立・旧富岡農学校跡の3遺跡の全容がほぼ明らかにされました。

いまここに、調査報告書を手にとってみますと、試掘調査の実施が決定されました直後、かつてない大規模な調査に期待と不安を抱いていました当時を振りかえり、感慨無量のものがわきあがってきます。

本試掘調査にあたり、ご指導、ご協力をいただきました諸先生・関係機関に感謝申しあげますとともに、惜しみなく労力を提供していただきました地元の皆様に心からお礼申しあげます。

長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会事務局長



遺跡附近の航空写真（南上空から）



藤橋遺跡遠景（東から）



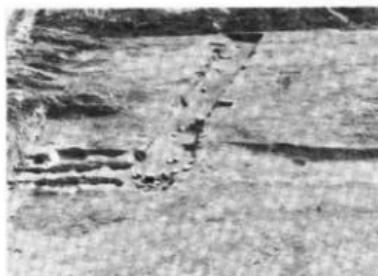
藤橋遺跡第1号住居址（西から）



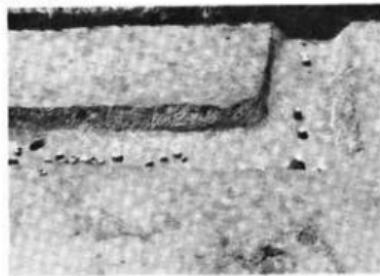
藤橋遺跡ピット群（138～140, 171～174）



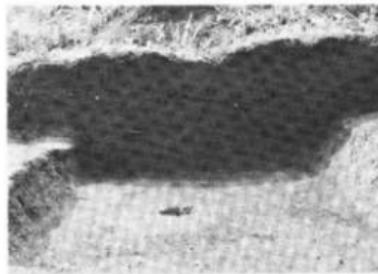
華橋遺跡第1号溝（東から）



第1号溝北東コーナー（北から）



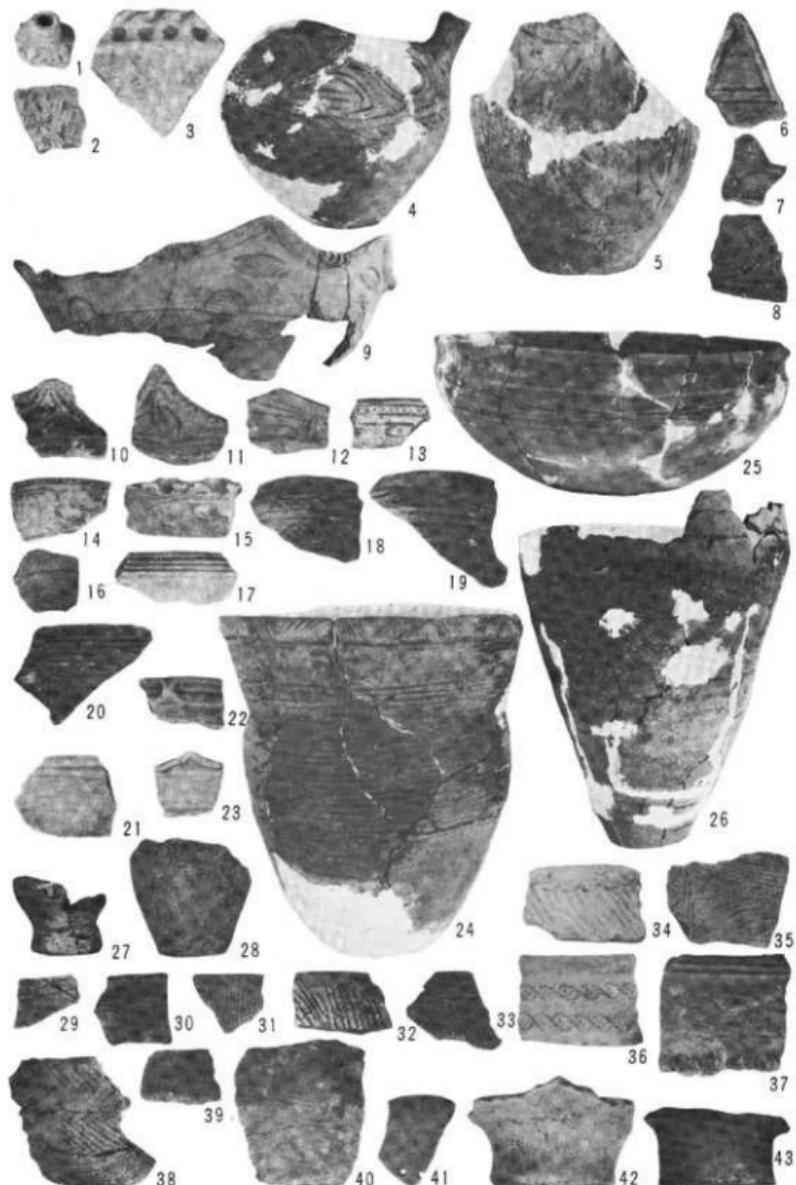
第1号溝北西コーナー（北から）



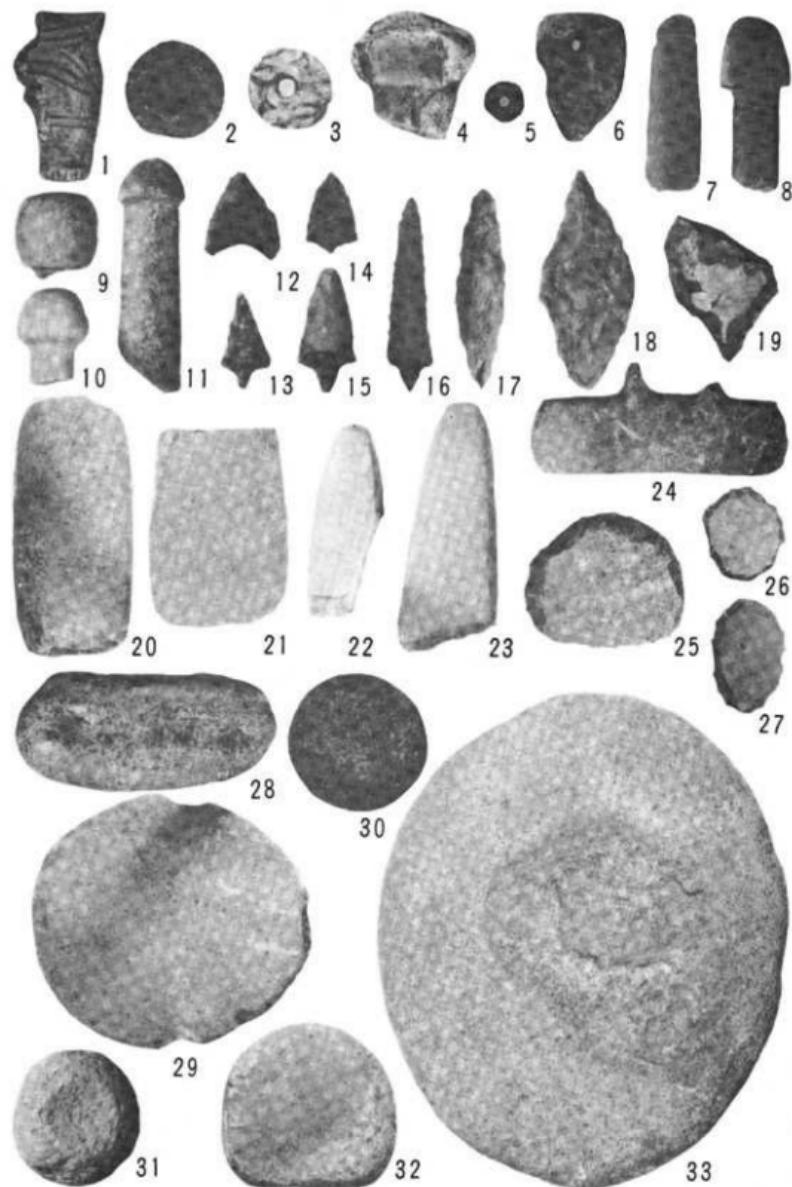
第1号溝西辺断面



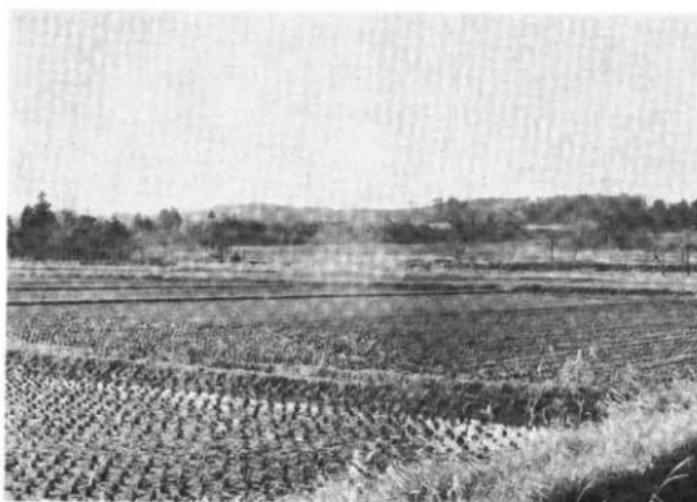
第1号溝北辺断面



縄文土器 (1~25・27~43:1:4, 26:1:7)



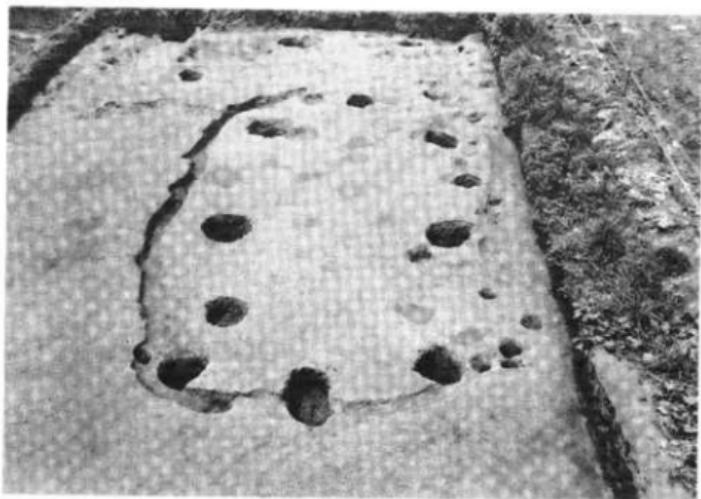
土製品・石製品・石器 (1~6…1; 1,5,7~33…1; 3)



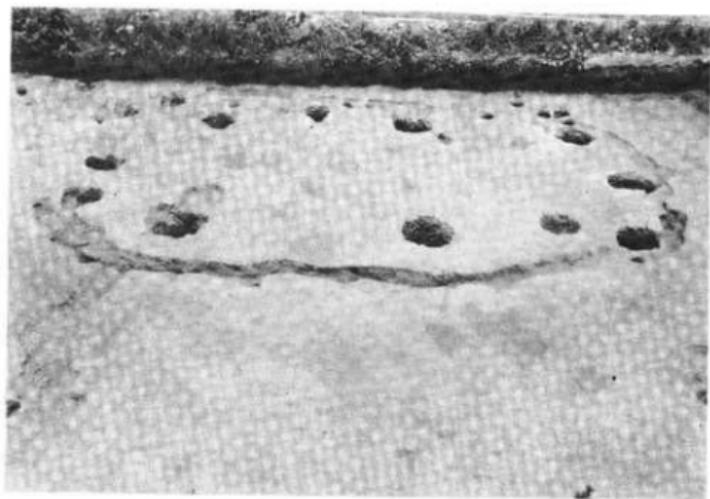
尾立遺跡遠景（東から）



尾立遺跡近景（西から）



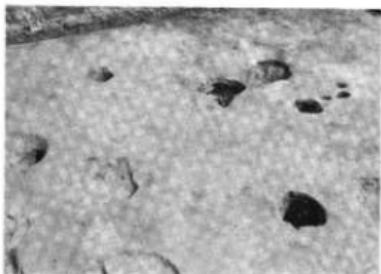
尾立遺跡第1号住居址（東から）



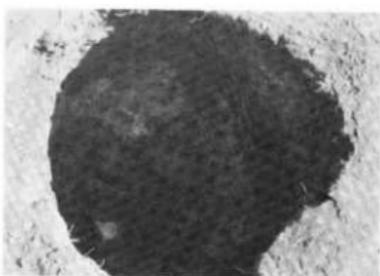
尾立遺跡第1号住居址（南から）



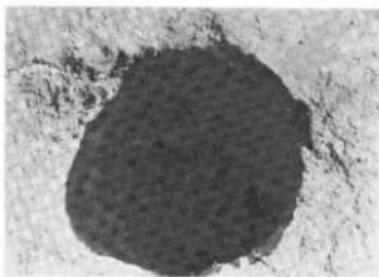
尾立遺跡第1号建物址（北から）



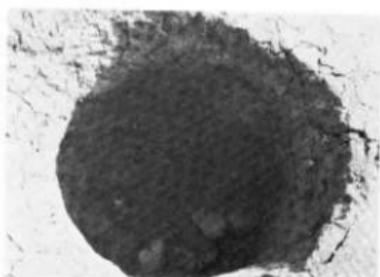
尾立遺跡第3号建物址（南から）



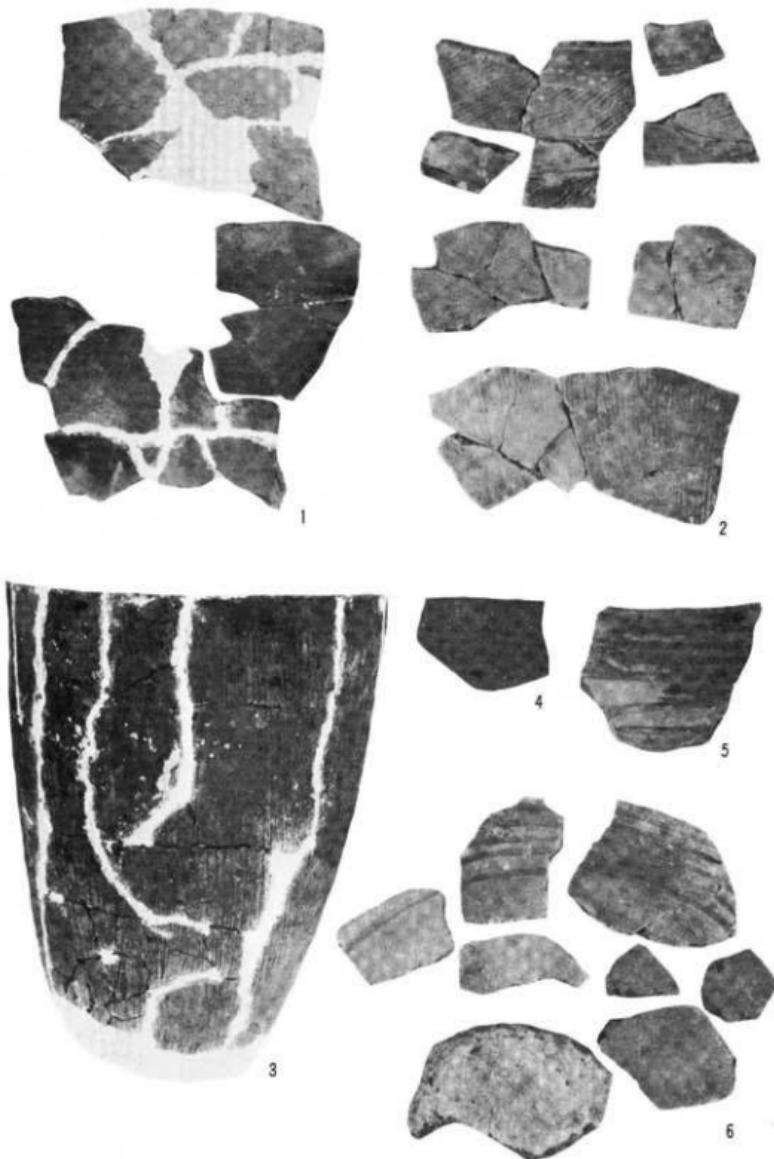
第3号建物址第1号柱穴



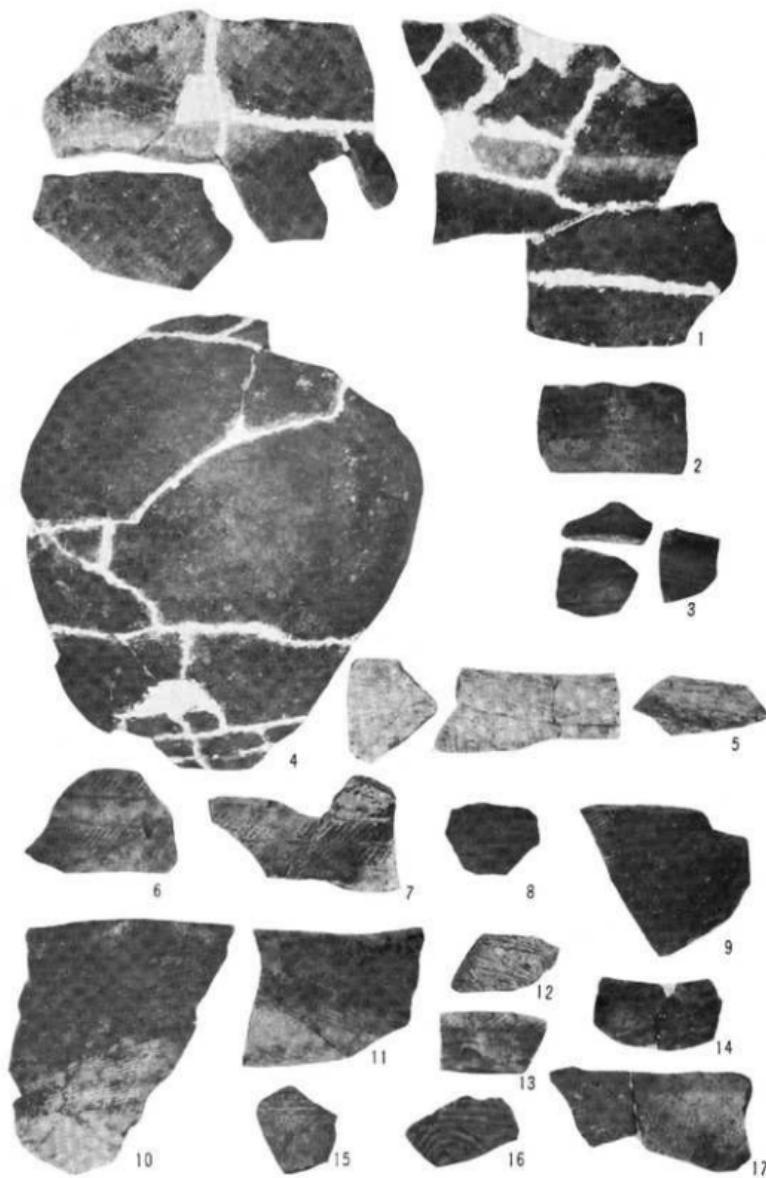
第3号建物址第2号柱穴



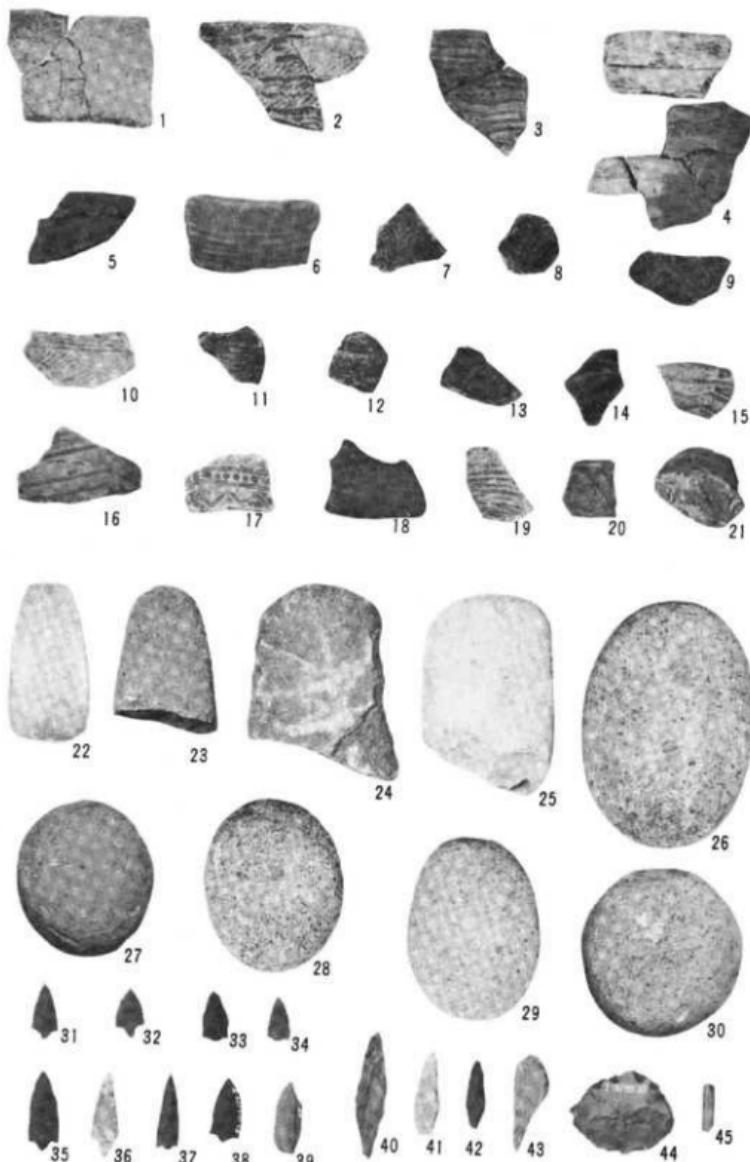
第3号建物址第3号柱穴



遺構出土土器 (1:3)



遺構出土土器 (1~5)・縄文土器 (6~17) (1:3)



弥生土器 (1~21) • 石器 (22~45) (1:3)

埋蔵文化財調査報告書

藤橋遺跡
尾立遺跡
旧富岡農学校跡遺跡

昭和52年3月22日印刷

昭和52年3月25日発行

発行 長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会

印刷 北越印刷株式会社